253

256

始

ヨ-6E-18
253258

吉良信之 著

ダルトンプランの進歩と其適用

天地書房發行

大正
12. 3. 26
内交

序

「より多くの自由へ。」

教育上に於けるこの叫びは今や世界的となり、それと共に「兒童の個性を發展せしめよ。」との聲は、苟も教育を口にするものゝ何人にも、日常繰り返さるゝ言葉となつた。

輓近に於ける教育上のあらゆる主義主張や、諸種の方案が、何れもそれを目標として進みつゝあり、試みられつゝある事には、新世紀に適合する教育として誰れしも贊意を表せずには措かない。然らば、自由とは何ぞ、個性の發展とは何を意味するぞ。この問題の省察に若干の時間を惜むなからん事を、第一に望まざるを得ない。

自由の意義に關する諸家の論爭を、こゝに列擧するの煩に堪えない。然しながら、それ等の何れも所詮は「眞の自我」の問題に歸着しなければならぬ。エドモンド・ホ

序

「より多くの自由へ。」

教育上に於けるこの叫びは今や世界的となり、それと共に「兒童の個性を發展せしめよ。」との聲は、苟も教育を口にするものゝ何人にも、日常繰り返さるゝ言葉となつた。

晩近に於ける教育上のあらゆる主義主張や、諸種の方案が、何れもそれを目標として進みつゝあり、試みられつゝある事には、新世紀に適合する教育として誰れしも贊意を表せずには措かない。然らば、自由とは何ぞ、個性の發展とは何を意味するぞ。この問題の省察に若干の時間を惜むなからん事を、第一に望まざるを得ない。

自由の意義に關する諸家の論爭を、こゝに列擧するの煩に堪えない。然しながら、それ等の何れも所詮は「眞の自我」の問題に歸着しなければならぬ。エドモンド・ホ

ルムス氏の言ひたるが如く、「あらゆる行動の自我に發源したるが、卽ち自由である」とは至當の見解でなければならぬ。

「自我の抑制」と「自我の表現」とは自由を形成する二大要素である。この矛盾したるが如き二つの要素が調和融合せられて、其處に眞の自由を認める事が出來るのではなからうか。

「最善我の發展」「低き我の最善我に對する服從」これを企圖することが自由でもあり個性の發展をも意味する。

然し乍ら、自我表現に對してはどうしても自我の抑制が伴はなければならぬ。抑制とは他の力に依る强制ではない。社會公共善のために盡くさんとする自我の創造活動である。卽ち自我抑制は一種の自我表現であり、窮極に於てこの兩者は相一致しなければならぬ。其處に眞の社會的活動が營まれる。

こゝに於て社會を形造る個人相互間の「協働」が自由の一分派として生じなければ

ルムス氏の言ひたるが如く、「あらゆる行動の自我に發源したるが、卽ち自由である」とは至當の見解でなければならぬ。

「自我の抑制」と「自我の表現」とは自由を形成する二大要素である。この矛盾したるが如き二つの要素が調和融合せられて、其處に眞の自由を認める事が出來るのではなからうか。

「最善我の發展」「低き我の最善我に對する服從」これを企圖することが自由でもあり、個性の發展をも意味する。

然し乍ら、自我表現に對してはどうしても自我の抑制が伴はなければならぬ。抑制とは他の力に依る强制ではない。社會公共善のために盡くさんとする自我の創造活動である。卽ち自我抑制は一種の自我表現であり、窮極に於てこの兩者は相一致しなければならぬ。其處に眞の社會的活動が營まれる。

こゝに於て社會を形造る個人相互間の「協働」が自由の一分派として生じなければならぬ。個人間の協働は更らに、國家民族間の協同となり、其處に人類理想の社會を形造ることが出來るではなからうか。

輓近に勃興せるあらゆる文化運動は、所詮はこゝを目指して進んで居るものに他ならない。況んや文化の原動力たる教育に於て、これを無視することに何等の意義があらうぞ。然し乍ら、その教育の實際に於ては、尙幾多の矛盾缺陷の多かりしを、吾々はどうしても見逃すことが出來ない。

ダルトン・プランが、輓近自由教育運動の總果であるとは、今や漸やく一般に認められて來た事實である。舊態の學校教育の弊より脫却して、眞に「個性の發展」を企圖し、個人間の協働を重視し、文化を獲得するには、經驗に依るの他なきを斷じ、こゝに眞に自由教育の總果を收め得たバークハースト女史の計劃が、如何に有意義のものたりしか。

然れ共吾人教育の實際に携る者は、更らにより以上に女史の計劃を發展せしめ、成

功せしめなければならぬ。

私は本書に於てダルトン・プランの根本思想を十分に解剖することの出來なかつたのを遺憾に思ふ。然れ共、その實際的方案が、如何に良く、從來の敎育思想を綜合し具現したるかは直ちに判明すべく、後日を期して、私はその根本思想の研究を完成せんことを誓ひ、多望なる我敎育界に本書を提する。

大正十二年二月二十日　東京小石川の寓居にて

吉良信之識

ダルトン・プランの進歩とその適用目次

緒言

一、自己敎育への道……一
二、ダルトン・プランの唱導……三
三、バークハースト女史の人物閲歷……四
四、ダルトン・プランの實施……七
五、私の感想と抱負……九

前篇

第一章　ダルトン・プランの意義と價値
一、ダルトン・プランの意義……一一
二、個性教育問題の解決……一三
三、ダルトン・プランの研究資料……一七
第二章　ダルトン・プランの三大原理
一、自由……二一
二、協働……二七
三、仕事に對する理解……三一
第三章　社會的生活の實驗所としての學校
一、環境の價値と實驗室……三四

二、教育の生活化……三六
三、創造活動に依る文化の獲得……三九
四、學校生活の全改造……四三
第四章　ダルトン式學校の一日
一、第五學級兒童ホレース・マーシャル……四五
二、英國ステプニー學校の一日……五二
第五章　學級組織の改革
一、個別教育と團體教育の調和……五九
二、學校に對する觀念の變更……六二

三、質問教式の發展……六三
四、ダルトン・プランと教師の責務……六五
五、兒童の對教師觀訂正……六七
六、ダルトン・プランに於ける學級教授……六八

第六章　時間割の束縛より解放

一、經驗的自由と時間割……七一
二、兒童の自發的興味……七四
三、私の經驗を……七七
四、性能の差異と時間割……八〇
五、誤解されたる興味……八三

第七章　實驗室の準備

一、實驗室の要件……八五
二、實驗室主任の教員……八八
三、實驗室に於ける注意……九一
四、實驗室の概觀……九三
五、各種進度表の記入法……九八
六、本章のむすび……一〇六

第八章　作業の豫定案

一、豫定案の意義と價値……一一〇
二、豫定案の作製……一一四

三、豫定案の備ふべき條件……一二一

第九章　協働の保障

一、作業の契約……一二四
二、新舊の教育方法……一二六
三、新方法の實施……一二八
四、實驗室内の學習……一三一
五、自由と責任……一三三
六、ベルと學習……一三五

第十章　教科書及參考書に關する諸問題

一、教科書の價値……一三七

二、ダルトン・プランと教科書の改革……一四〇
三、教科書改革の要件……一四二
四、參考書の價値……一四六
五、兒童用參考書たるの要件……一四九
六、參考書の缺乏……一五一
七、我國字問題と參考書……一五二
八、教育實際家に望む……一五四

第十一章　我國教育界の實狀とダルトン・プラン

一、我國の教育方針とダルトン・プラン……一五九
二、我が教育制度とダルトン・プラン……一六四
三、我國の教育的施設とダルトン・プラン……一六八

四、教員に關する問題とダルトン・プラン……一七一
五、兒童に關する問題とダルトン・プラン……一七四
六、その他の問題……一七六

第十二章　從來の個別的教授方案との比較

一、主なる個別的教授方案……一七八
二、マンハイム式學級編成法とダルトン・プラン……一八一
三、ピユブロー組織とダルト　・プラン……一八三
四、ニユートン案とダルトン・プラン……一八五
五、バタヴイア案とダルトン・プラン……一八六
六、セントルイ案とダルトン・プラン……一八七
七、サンタバーバラ案とダルトン・プラン……一八九

八、ノースデンバー案とダルトン・プラン……一九〇
九、分團教授とダルトン・プラン……一九一
十、結論……一九三

第十三章　個人作業の問題とダルトン・プラン

一、個別教育問題の進展……一九六
二、モンテツソリ法とダルトン・プラン……一九七
三、プロヂエクト・メソドとダルトン・プラン……二〇〇
四、カードシステムとダルトン・プラン……二〇三

第十四章　ダルトン・プランの利益

……二〇七

第十五章　ダルトン・プランに對する非難とその辯駁……二一六
第十六章　小學校に於けるダルトン・プラン
一、我國小學校に於ける實施方案……二三六
二、兒童大學々校（米）……二四二
三、ウエストミンスター・シテー・スクール（英）……二四八
四、ウエストミンスター・ジウイッシ・スクール（英）……二五一
五、ジョン・エヴエリン・スクール（英）……二五五
六、リーヅ小學校の經驗……二五七
七、リンチ氏の實驗……二六〇
第十七章　中等學校に於けるダルトン・プラン

一、我國の中等學校とダルトン・プラン……二六三
二、ダルトン・ハイスクール（米）……二六八
三、ストリーザム女子中學校（英）……二七二
四、ベデールス・スクール（英）……二七九
五、グリーン中學校（英）……二八七
第十八章　英國に於けるダルトン・プランの發展　二九二
第十九章　ダルトン・プランの發展
一、ダルトン・プランの將來……三〇八
二、ダルトン・プランの特色……三一〇

後篇

第二十章　各教科の取扱とダルトン・プラン……三一三
第二十一章　歴史科
一、歴史科に於ける經驗……三一六
二、歴史科豫定案例……三一八
三、附說……三三四
第二十二章　地理科
一、地理科に於ける經驗……三三五

二、地理科の參考書……三三七
三、地理科豫定案例……三三八
第二十三章　理科
一、理科に於ける經驗……三五四
二、理科實驗室の設備……三五五
三、理科豫定案例……三五六
第二十四章　國語科
一、國語科の研究資料……三七七
二、國語科に於ける經驗……三八一
三、國語科豫定案例……三八二

第二十五章　數學科
一、數學科に於ける經驗……三八九
二、數學實驗室の準備……三九二
三、數學科豫定案例……三九三

ダルトン・プランの進歩とその適用

吉良信之著

緒言

一、自己教育への道

自己教育に徹底せしむることが、教育理想の終局目的であることは、現在の改造的教育論者のみな等しく唱ふる所であり、何人も否定すべからざる眞理である。社會文化の向上に伴ひ、個人の生活も益々複雜化して、教育の必要は愈々痛切に感ぜられる。現今歐米に於て教育上の新運動として注目されつゝある、アダルト・エヂユケー

ション、即ち、人間の生涯を通じて、正則的に教育を施さんとする大人教育の思潮も、如上の痛切なる要求を物語つて居るものではあるまいか。

然しながら、所詮は各人自らが、自らを教育しなければならぬ。然らざれば、各自がその生活環境に適應し得るだけの、教育を受くる機會と可能性とは、非常に尠いものとなるであらう。かるが故に、自らを教育し得る能力を陶冶することが、現代の學校教育に於て、先づ第一に要求せらるゝ點である。

如上の見地よりするとき、現今の學校教育なるものが果たして滿足せらるべきものであらうか。その卒業生は何れも、卒業後に於いて自己教育の道を進み得る能力を有するか、遺憾ながら私は直ちに然りと答へる事は出來ない。其處にはあまりに多くの缺陷が横り、中には却て私達の要求に反したる事も行はれて居るからである。多くの教育學說も、次から次へと新らしく現はれて來るが、學校教育の現狀は依然として不徹底である。

二、ダルトン・プランの唱導

この時に當りてダルトン・ラボレートリ・プランと稱する一新主張が、米國に於て、バークハースト女史に依り創始唱導された。これは女史の長い間の、尊き經驗より生れたるものであつて、從來の學說とは異り、その一大特色とする所は、理論と實際とが良く一致並行せる點であり、單に理論のみに偏して、實際のこれに伴はないといふ缺點は見出すことが出來ない。故に、この新主張の價値も今や萬人の認むる所となり、米國に於ては言ふまでもなく、英國を初めその他の歐洲諸國にては何處に於ても熱心に研究され、且つ實施されつゝあるのである。

我國へも、既に二三の人士に依りて、この學說主張の如何なるものかは紹介せられ、これに關する著書も現はれる樣になつた。然しながら、元來、國情制度等を異にする外國に於いて實施されつゝある事を、直ちに採つて我が國に行ふといふことは出

來ない。從つてダルトン・プランに關しては、今後の實際的研究に俟つて、初めて我國に適用され得る事にならうと考へるのであるが、私は本書に於て、實際家のために幾分かの暗示を與へ、多少の參考ともならん事を望んで居る。

三、パークハースト女史の人物閲歴

抑も、ダルトン・プランの創始者ヘレン・パークハースト女史とは如何なる人であるか。その人物閲歴等を明らかにしなくては、ダルトン・プランの背景がわからないから、私は簡單に、こゝで述べて置かうと思ふ。

女史がその案を實際に試みたのは一九一九年であるから、極めて最近のことである。然し乍ら斯樣なる新學説が突然に考へ出されるものではないことは明らかである。實に、女史がこの説を案出し、實驗し、世間に發表するまでには、長く尊き年月を經過して居るのである。

女史は教員生活の初めを田舍の單級學校に過ごした。この時からして早く既に女史の教授方法の改革案は、胸中に醞釀せられつゝあつたのである。何人も知るが如くに、單級學校の教授は實に困難なものである。少しくへまなことをやれば一時間はどうして過ごしたかわからなくなり、有耶無耶の中に終ると言ふことは決して珍らしくはない。教師は何時もあつちへ行つたりこつちへ來たりして、忙しく働いて居なければならず、働らく割合に効果を見ることが少い。我國でも單級學校に關する研究は一時は隨分盛んだつたこともあるが、その研究は依然として舊の如く、單級教授の上に一大改革を試み、その回轉を圖る樣な所へまでは、研究が屆かなかつた。

女史はその後は普通の小學校、師範學校、或は教員養成所等に教鞭を執り、年と共に經驗を加へ、識見を增した。その間にあつても絶えず女史の胸中には、單級小學時代に得たる教授改革の思想が蓄へられ、成長しつゝあつた。十人十色、その個性に差異ある兒童に對して、最つと適切なる取扱法はないものであるか。生活環境に順應せ

しむべく、一層有効なる陶冶の方法はなきか、從來の如く社會生活と學校生活とが、あまりに沒交渉なることは、學校教育の一大缺陷である。之れをしてもつと密接せしむることは出來ないものか。個性を尊重せんとすれば、兒童の活動の自由を認めてやらなければならぬ。其處に眞に兒童自からの尊き努力が生れるのではなからうか。

右の如き問題に對する解決案として、女史の獨創なる「實驗室案」(Laboratory plan)なるものを案出したのは、一九一三年のことであつた。然し乍らそれを直ちに實行することには容易にならなかつた。其處で女史は一層深く教育の原理を窮めんがために伊太利に渡り、有名なるモンテッソリー教育を研究した。このモンテッソリーの教育方法は、後にも述ぶるが如く、ダルトン●プランとは餘程趣を同じうして居るものである。或論者の如きは、モンテッソリー教育は因であつて、ダルトン●プランはその果であると言つて居る程である、兎に角、女史は伊太利に於けるその研究に依つて、餘程の暗示を受け、新說の唱導に力を得たのは事實である。

四、ダルトン・プランの實施

斯くの如くにして漸やく確固たる成案を得て、愈々案を實施したのが一九一九年のことで、初めは自分の受持である不具兒の單級小學校で試みた。前後二十年の長き間女史の胸中に醞釀された、この新教育の方案が、どうして失敗に歸する事であらう。豫期以上の効果を立證し得たこの新方案は間もなく、マサチユセッツ洲ダルトン中學校に於て實施せられることになつたのである。かくして一九二〇年、「ダルトン實驗室案」(Dalton Laboratory Plan)なる名稱が付せらるゝに至り、廣く社會に發表され、世人の注目を惹く事になつた。

間もなくこの新說は英國に渡り、却て米國に於けるよりも盛んに研究される有樣となり、バークハースト女史自らも、屢々英國よりの招聘に應じて渡航し、或は實地の指導に、或は又講演に、大いに活動せられた。今日では英國にはダルトン●プランを

實施せる學校は非常に多く、その研究結果の如きも逆に米國へ渡ると言ふ樣な事になり、英米兩國に於ける研究の盛なること實に驚くばかりである。英國に於けるストリーザム高等女學校、米國に於けるダルトン中學校、ニューヨークの所謂兒童大學等はダルトン・プランの完全なる形を備へたものとして、殊に有名である。

他の諸國に於ても大いに研究せらるゝの氣運に向ひ、殊に獨逸よりの最近の通信に依れば、同國の文部省では、この度び全國を通じて大々的に、この案を實施する計劃であると云ふ。

右述べた所にても明らかなるが如くに、今やこの案の價値は明白である。勿論、未だ多くの經驗を重ねない事であるから、中には困難なる點や疑はしき點もあり、未だ解決されざる問題も取り殘されてはあるのだらう。けれ共、無暗に高遠なる理想に馳せ、實際のこれに伴はざりしが如き從來の學說と異り、理論と實際の良く合致せるダルトン・プランの、特色あり價値ある敎育上の新主張新學說なることは決して疑を存じない。

五、私の感想と抱負

私は私自身の經驗よりして、眞に自己活動に依る敎育の行はれんことを翹望して居た。十年來、その方案に就いても考究し來つたことである。偶々ダルトン・プランの唱導する所を見て、その所說の眞に我が意を得たるを喜び、どうしてもこの敎育方法の我國に於ても實施せられなければならぬ事を確信して居るものである。

私は曾つてダルトン・プランに關する紹介的の小論文を雜誌「小學校」誌上に發表し、又最近に合著として、やつぱり小學校に發表せるものを訂正增補して少しばかり書いたものを出版することになつて居る、然るにその後歐米に於ては、その實際的方面の研究は愈々進步を見るに至つたので、こゝに又別にこの小著を發表し、稍々纒まつた研究をいたしたいと思ふ。

唯、私はこの著に於て單にダルトン・プランを紹介するのみはしない。既に多くは紹介された事であるから、所々に私の私案を附加して批判的論述を試みたいと思ふのである。

前篇

第一章　ダルトン・プランの意義と價値

一、ダルトン・プランの意義

緒言にも述べたるが如く、ダルトン・プランは米國のバークハースト女史が唱導せる所のものである。詳しくはダルトン・ラボレートリ・プラン（Dalton Laboratory Plan）と稱する。卽これを直譯すれば「ダルトン實驗室案」となる。實驗室の意義は後章に於て詳論するつもりであるが、こゝに一言すれば、女史の見解によると、學校なるものは社會的生活の準備所であり、實驗所であるから、社會的の條件はすべてこれを學校に取り入れ、學校にて實驗せしめなければならぬと言ふ所より、ラボレートリ・

プラン、卽ち實驗室案と稱するに至つたものである。

女史の案は最初マサチユセツツ洲にある、ダルトン・ハイスクールに於て實施された。ダルトンなる名稱はこの學校の所在地の市名より來つたものに他ならぬ。

右の理由よりして、ダルトン・プランは兒童の學校に於ける學習をも、すべて社會的生活の準備であり、實驗であると見る。而して學習はすべて作業(Work)であるとなし、それを完成するに、敎師と生徒との契約とする、卽ち學習なるものを一種の契約仕事(Contract Job)として、生徒をして飽くまでも責任を重んぜしめ、仕事を完成せしむるのである。それがために學習事項のすべては、一箇月間になすべき分量を單位として、豫め決定して置く。而してそれを記載したる表を各生徒に所持せしむるのである。それに依つて、一箇月間には必ず完成する事を約束する。この表をAssignmentと稱する。適當な譯語も一寸考へ出さなかつたので、私は今まで豫定案と呼んで居た。他の方々は「割り宛て表」と稱して居るものもある樣である。然し私はやつぱり豫定

案と呼ぶことにして置く。

從來の學校敎育に於ける敎室は實驗室と改稱せられ、各敎科別に依つて、それ〴〵の實驗室が準備せられなければならぬ。兒童各自は、所持せる豫定案に依りて、自由に欲する所の實驗室に入りて、自己の作業を完成する。

二、個性敎育問題の解決

右述べたる所が、ダルトン・プランの概念であるが、尙詳細に涉りては、次章以下の記述に依りて明らかにする。が、要するに、ダルトン・プランは輓近の敎育思想が最も重きを置く自由を根柢として、從來の傳統的勢力に囚はれた敎育を打破せんと試みたものである。敎室を改革し、學級制度を廢し、時間割の束縛より兒童を解放し、自由の天地に、自己自身の進むべき道を開拓せしめんとするものだ。自由を束縛する事の甚だしかつた從來の敎育に對する反動として、ダルトン・プランの唱導はまこと

に適切なるものである。プロヂエクト・メソドの如き、兒童を具案的に創造的活動をなさしむる、教育方案の如きも、或意味に於てはダルトン・プランの前驅であつたかもわからぬ。その他、モンテツソリ教育法の如きも、確かにダルトン・プランとは關係淺からぬものである。

米國に於て發生したるダルトン・プランが保守的な英國へ渡りて、却つて米國に於けるよりも熱心に研究せられ、實施せられて居ることもダルトン・プランの價値を裏書したものと言はなければならぬ。實際的効果の多きダルトン・プランは、たとへその原理に於て、敢て新奇な所なくとも、或は人心を驚ろかす樣な點はなくとも、確かに一般の教育社會に歡迎せられ得る理由がある。從來の教育法が企てゝ未だ及ばざりし點を、大膽に實行せる所は何と言つても、その一大特色でなければならぬ。時間割の廢止と言ひ、學級制度の改革と言ひ、從來の自由論者も容易には實行するに至らなかつた。

各個性を異にし、能力を異にした兒童に對して、同樣の教育法を用ふるの暴なることは何人も知る、あまりに明白なる事實である。これまでの教育思想家や、實際家がこの問題に對して如何に頭を惱ましたことであらうか。今までに現はれたる多くの實際的の取扱方案が、期待程の實効なきに失望せる時、この問題に解決を與へたるものが、ダルトン・プランであるとすれば、その價値も自から分明なると共に、教育實際界に歡迎せらるゝ理由もわかるではないか。

吾人がダルトン・プランに關して熱心に耳を傾くるも、如上の價値を觀取したるに他ならぬ。唯、吾人はこの案に關する今後の實際的研究に依りて、一層の價値を發揮せしむる樣に努めなければならぬ。

現今、未だ日本にては、實際的の研究にまでは進んで居ない。それもその筈である。ダルトン・プランなる名稱の紹介せられたのが昨年（大正十一年）の七月頃だから、未だそんな所まで研究の進まないのも無理はない。澤柳政太郎博士が歐米の視察旅行

より歸られて、大いに紹介せられた樣である。それから間もなく雜誌の上にも、二三紹介せられた。

ダルトン・プランの價値が我國に於て確認せらるゝのは未だ二三箇年も後の事だらう。然しながら、新說が現はるれば直ちにそれを無批判に採用し、十分に研究を完成せざる中に早くも中止して顧みざるのが、我國敎育界の現狀である。その意味に於てダルトン・プランもその價値を確認されずして終る事がありはせぬかを私は憂ふる。本書を讀まれる方は、斯樣な事のなき樣、十分に研究を完成せられ、その實効を收められんことを望む。

歐米に於ても、ダルトン・プランに就きては未だ研究中である。中には、いくらかその價値を疑ふものもないではないが、然しながら、たとへ多少の缺點はあるにしても、今やその價値は疑ふべくもない。

三、ダルトン・プランの研究資料

ダルトン・プランに關する研究資料の如きも今の所豐富にあるわけではない。況んや、日本に於ては、未だ紹介されたばかりの今日、研究資料は絕無である。故に、目下これに關する研究は可なりに困難である。實際的方面の事からも、主として歐米諸國に於ける實驗の結果をもとゝして述べなければならぬのは止むを得ない。但し、緖言にも一言したるが如くに、私は本書に於ては成る可く私の私見や批判を交へて、論述して行きたいと思ふ。

參考書としては大體次の如きものが、今までに於て發刊されたものである。先づ第一に、

Education on the Dalton Plan.

By Hellen Parkhurst.

何と言つてもこの書がダルトン・プランの經典とも言ふ可き價値のあるものである創始者、バークハースト女史の原著であるだけでも、何を措いても先づ讀まざるべからざるものだ。ダルトン・プランの原理と實際とが良く調和せられて記述されてある。次に

The Dalton Laboratory Plan.

By Evelin Dewey.

ダルトン・プランに關する纒つた研究は、この書が最初に出版されたものだ。これもダルトン・プランの概念を得る爲めには非常に恰好の本である。而して本書は、成城小學校の赤井米吉氏に依りて、「兒童大學の實際」なる名稱のもとに、既に飜譯、出版されて居る。

Dalton Plan Assignment.

By the Staff of the Streatham County Secondary School

本書は卽ち英國に於いて、ダルトン・プランの實施に依りて有名なるストリーザム女學校の編纂にかゝるものにて、前後兩卷に別れて居る。實際的方面の研究であつて、主として豫定案に關する同校の研究を集めたものだ。前卷には英語、歷史、地理の三科目に就きての取扱法を論じ、後卷にては理科と數學に關する取扱に就きて述べられてある。尙、この五科目は、ダルトン・プランに於ける主要科目であることを、一言附加して置く。

今までに出版された纒つた書物と言へば右述べたもの位であらうと思ふ。尙その他に、諸種の雜誌へ現はれた、敎育實際家の實驗結果の報告や、短い論文の如きもの、或はダルトン・プランに對する批評、感想の如き、斷片的のものは可なりに數多くある。それを一々こゝに列擧するのは煩はしいから止めて置くが、その中にて最も重要なものは

The Times Educational Supplement.

である。これにはよく種々な記事が掲載されてある。

尙、英國のベデールズ・スクール（Bedales school）より毎年發行されて居る

Bedales Record

No. 33.

は、ダルトン・プランを同校に實施せる結果の報告や、研究を滿載して居る。これも餘程參考になるものと信じて居る。

右述べたるが如くに、目下の所、我國に於けるダルトン・プランの研究は、確かに難事である。然し、將來に於ては必ず研究されなければならぬものである事は、私の固く信じて居る所である。

第二章　ダルトン・プランの三大原理

一、自　由（Freedom）

教育上の根本原理としての自由思想は、かのルソーを初めとして、エレン・ケイ、モンテッソリ等その他現今の兒童中心主義論者の思想中に著しく現はれて居る所である。而して輓近に唱へらるゝ如何なる教育說も、この自由を無視したものは決してないのである。中には自由主義などゝ堂々自由を振りかざすものもある樣に、自由なる語は教育論者にとつては重要なものとなつて居る。

然し乍らその眞義に至つては容易にわからない。各人各樣の解釋を下して居るので、何れにするか去就に迷ふのである。ダルトン・プランもやはりこの自由を根本原理として居る以上は、これに關する明確なる觀念を有して居なくてはならない。私はこの

章に於て、自由の難かしい定義を調べる事は止めて、ダルトン・プランの自由とは如何なる意義を有するかを述べて置きたい。

バークハースト女史の言ふ自由とは、兒童が欲するがまゝになさんとするを言ふのではない。利己心より全く離れた、協同的精神より出發したる自由でなければならぬと言ふのである。

單に兒童が好むまゝにやると言ふだけでは眞に自由なる兒童と稱することは出來ない。斯かる兒童は、我儘なる行爲をする樣になりて他人を顧みず、協同的精神を失ふに至るものである。かくては社會なるものは決して成り立つものではない。故に兒童をして飽くまで調和的にして、且つ責任感の强き人たらしめ、公共善のために、他人と協同する上に於て、喜んでその才能を貸してやる樣にならねばならない、即ち我儘の域を脱しなければならない。

身體を自由に運動することは各人の有する自由である。それと共に精神を働かすた

めの自由も許されなければならぬ筈だのに、今の學校教育は時間割などに依つてその自由を奪つて居る。兒童自から作業を計畫するの自由、それを初めるの自由、これ等は何れも認めてやらなければならぬ事なのである。

この自由は、ダルトン・プランに於ては如何なる形となつて現はれて居るのであるか。

第一は時間の自由を認めると言ふことである。從來の學級教授に於ては、時間割と云ふものがあつて全くこの時間の自由を無視して居る。大體の標準に依つて、一時間になすべき仕事の分量を決定したものであるから、その仕事を完成するに就き時間に不足を來さうが、或は又餘裕があらうが、そんな事は大して問題にしなかつた。兒童をして、この時間割の束縛より解放し、兒童の欲するがまゝに時間を利用せしめん事を主張するのがダルトン・プランの叫びである。

言ふまでもなく人は各々仕事に遲速がある。算術の五問題を解決するのに、四十五

分を費すものもある。一時間を要する者もある。中には又三十分、或は二十分にして終了し得るものもあるであらう。斯樣なる差異あるものに對して、從來の如く鐘鈴の相圖により、數十人一齊に、或る作業に就かしめ、又は離れしむることは、言ふまでもなく大なる暴虐である。バークハースト女史が先づこの點に着目したのは、眞に當然なる事である。

次に第二としては方法の自由である。同一の結果に到達するにも、それまでの道は幾つもあるわけである。高山の頂きに登らんとしては、如何なる道を擇ぶも、登山者の自由であるが如く、或問題を解決するに當りては、その方法は決して一ではない。夫々自己の便宜なる方法に隨ひ、自己の考案せる所に依つて、解決策を講ずれば良い。

この點に於ても從來の學級教授は、殆んど兒童の自由を認めなかつたと言つても過言ではない。尤も、輓近の教育思潮は何れも兒童の自由活動を重んずる事に傾いて居

るのではあるが、實際に於て學級取扱上には、この方法の自由は認められなかつた。兒童の質問に依る開發式教授などは、多少兒童自からの活動を尊重したとは言へ、教師が豫定せる方案に、兒童を導き入れる事が多かつたのである。

この點に改革を加へた事も、ダルトン・プランの一大進歩である。故に、この案を實施せる學校の兒童は、その學習、研究等すべての作業は自己の欲するがまゝの方法に依つてなさしむるのである。唯、然しながら斯くせんには、十分なる研究資料と參考書とを必要とする。これ等に依つて各兒童は各自の最善と信ずる所に從つて學習を進めるのである。故に教師なるものは決してものを教へるものではなく、學習の指導者であり、研究の相談相手である。ダルトン・プランの實施によつては教師は教へるといふ態度を全く棄てゝ仕まはなければならないのだ。

以上述べたるが如く、自由の觀念がダルトン・プランの根本原理となつて居るのであるが、斯樣なる自由を認めると云ふことは必然的に、兒童に大なる責任を生せしむ

ることを忘れてはならぬ。

抑も責任は自由より生ずるものである。自由を束縛せられたる奴隷には、如何なる行動をなしても責任を生ぜざるが如く、自由なき所、責任も亦ないのである。從來の如き、束縛せられたる學級制度の下に於ては、生徒は決して學習上の事に就きては責任を負はなかつた。負ふべき必要はなかつたのである。一から十まで教師が責任を以つてなしたる事とて、兒童は單に受動的に働いて行けば良かつた。

然るに、バ女史の說に依れば、學校は社會的生活の實驗所であるといふ。それにも拘はらず、斯樣に無責任なる事をして居れば、學校卒業後、市民として活動するの能力を缺くことになる。學校は社會と離れては決して存在しないものだ。斯樣なる信念は卽ち自由を以つて、ダルトン・プランの根本原理の第一に置く樣になつたのである。

自由と責任、女史の說くが如くこれは市民たるものゝ最重要なる德である。善良なる市民を養成し、學校と社會とを同一のものたらしめやうとして、自由を高唱する女史の說は、彼の徒らに高遠なる理想に走せ、自由を云爲するの徒とは同日に談ずべきではない。

二、協働 (Co-operation)

ダルトン・プランの根本原理の第二として擧ぐべきは協働の觀念である。これは前章に於て述べたる自由と相待つて、ダルトン・プランの根本を形造るものである。バ女史の主張する協働的自由、卽ち協働と自由とは、學校を社會的活動の實驗所と見る女史の信念に依れば、當然斯くなるべきものなのである。

學校を眞の社會となすためには、學校に於ける各個の生徒は、絕えず互に作用しあはなければならない。學習も研究も、或は遊戲の間にあつても、各生徒が全く自己の事ばかり考へて居る事は、所謂我儘であつて、決して自由ではないのである。故にダ

ルトン・プランでは生徒相互間に於ける助力、忠言等を非常に重要視する。從つて學習に就きても、特に討論會の如きものを設けて、互に意見を發表せしめ、研究に資せしむるのである。

斯樣に生徒相互間の協働を重んずることは、敎師と生徒間の協働も自らに生ぜしむる。全くダルトン・プランは從來の方法とは異つて、この兩者の協働がなくては到底實施することは出來ないのである。この點に關しては、尙別の項に於て詳論する考へではあるが、學習はすべて敎師と生徒との間に契約仕事の形としてなされ、從つて兩者は契約の當事者としての責任を持つ。故に、何れかの一方がその契約を破ると言ふが如き事あらば、卽ち兩者間に於ける協働が失はれるが如き事あらば、ダルトン・プランの根本は破壞せられる。

如上の理由に依りて、敎師と生徒との關係も、從來のものとは餘程形を變へたものとならざるを得ないのである。相互間には親密なる感情が自からにして生じ來り、生

徒が敎師に對するに、威壓に似たるものを感ずることもなく、敬愛の念は生徒の心を滿たすであらう。從つて學校に於ける日々の課業も、喜を以つてなされ、困難なる事からに遭遇するとも、却つてそれを好ましき事と思ふ樣にもなる。ダルトン・プランを實施せる學校に於ては何れも、生徒の學習態度に驚ろくべき變化を來した事を報告して居るのに見ても、右の事實は明白である。

尙、生徒相互間、敎師生徒間の協働との他に、敎師相互間の協働も非常に要求せらるゝ所である。一學級一敎員のもとにありては、多少協働を缺くことがあつても——それは甚だ好ましからぬ事には相違ないが——良かつたが、ダルトン・プランに於けるが如く、全校の敎員が、全生徒に接するものにあつては、些細の事にまで協働し、一致しなければ、到底學校全體の活動を圓滑ならしむることは出來ない。すべての敎員は共同の責任を持ち、學校の問題に對しては、各その心を集中する樣にしなければならない。全敎員が全生徒に對して責任を持つから、其處には自ら共通の問題も生ず

るわけである。

右述べたるが如く、ダルトン・プランに依る學校の改造は、卽ち學校を眞の社會となす改造であつて、すべての社會的條件を學校に導き入れる事に依つて達することが出來る。言ふまでもなく、社會は人々の協働的團體である。單に多數の人が同時に存在して居たとて、それを以つて社會を形造つて居るとは言はれない、人々の間に、互に交渉があり、互に協働してこそ、そこに初めて社會の成立を認める事が出來るのである。

然るに從來の如き學校組織のもとに於いて、果たして幾許の社會的要素を見ることが出來るのであらうか。前述せる、社會的條件の最も重要なるものゝ一である協働と言ふ事もどれだけ行はれて居るであらうか。成程、休息時間等に於ける遊戯などの際には、彼等兒童の間に多少の協働、交渉も行はれるであらうが、教室内に於ては相互の間には殆んど協働はない。教師との間には、時に問答ありて、いくらか交渉、協働

もある樣ではあるが、それさへ協働と稱すべき程のことではない。

斯樣なることでは眞に社會をなして居るとは言はれない。バークハースト女史がこの點に着目して、學校生活の社會化を企圖したのは甚だ有意義の事たるを失はない。故に、後章に於ても述ぶるが如く、ダルトン・プランを實施せる學校にありては、兒童相互の協働の如きも力を極めて推奬し、或は研究團體を組織せしめて、相互の研究に資し、又は研究の結果を示し合ひ、相談もなし、批評をもするのである。

三、仕事に對する理解　(Perceptionof job)

ダルトン・プランの第三の要件は、仕事に對する理解と言ふことである。倫理學上の説明に依るも、知の伴はざる行爲は、價値ある眞の行爲とは認めない。行爲には各その意義があり、目的がある。その意義目的を理解せずしての行爲は甚だ無意味なるものである。學習も一の行爲である以上は、それを爲さんとする初めに當つて、兒童

は各方面からこれをながめて、如何にしてその目的を達せんかを計劃しなければならぬのである。

從來の學級教授に於ては、この點にも非常に缺陷が多かつた。教師中心の教授に於ては、普通、教授時間の初めに目的指示をなす。即ちその時間中になすべき仕事の分量や、目的に就いて簡單に生徒に告げるのである。然しながら、單にそれだけでは、一部分の生徒を除いては、殆んど完全に自己のなすべき仕事に關して理解を得ることが出來ない、甚だしきに至つては、現在自分は何をなしつゝありやさへも判らず、呆然として居る生徒もあるのである。從つて學習の興味も大しては起らない。

「興味のなき所には努力もない。」と言ふことは今日の心理學が吾々に教へて呉れることである。興味を以つて學習せしむることは、疲勞少くして最大の効果を收め得るは言ふまでもない。然しながら、今日の學級教授に於ては、稍々もすればその興味は受動的に終り、教師は斯樣なるあまりに價値もなき興味のために、種々なる教授方法

の技巧なども爲すのであるが、ダルトン・プランが最も徹底したる興味、即ち自己活動による興味を主張するのは、その一特色であると言はねばならぬ。

地理を學習するにしても、歴史を研究するにしても、その他如何なる事をするにしても、その作業は全然生徒自身のものとしてなさしむること、これが即ちダルトン・プランの主張する所なのである。故に生徒は自己の作業をなすに就いては、あらゆる方面よりの理解がある。教師は、學校の仕事に對する要求と、その要求を滿たすために必要なる指示とを明瞭に生徒に示すのである。然る後、生徒をして自由に活動せしむる。

今日の進みたる學習經濟の研究よりしても、如上の見解が學校に於て實施せられることは、甚だ望ましきものなることは明らかである。

第三章　社會的生活の實驗所としての學校

一、環境の價値と實驗室

既に述べたる所に依りても察せらるゝが如く、ダルトン・プランの根本觀念は、社會的條件はすべて學校に於ても具備せしむべしと言ふ點にある。

人が社會的活動をなすに就きては、それ〴〵に適當なる環境と言ふものが必要である。例へば商業を營むがためには店舗を構へ、農業の經營には土地を要する。工業には工場の設備あるが如くに、凡てのものは、夫れに適應せる場所をもつてゐるのである。然るに從來の學校の教室なるものは、兒童が學習をする場所としては、決して適當なものとは稱することが出來なかつた。最つと、研究上都合の良き環境を作る事

は、非常に必要なる事がらであつた。

尤も從來とても理科、手工、音樂等の科目に就いては、出來得る限り特別の教室を作らうと試みたものではあるが、特別教室の要は決してこれ等の科目のみには限らないのである。國語にも、算術にも、地理にも、歴史にも夫々の教室の必要なることは明白である。然るに我國に於ては、小學校にては斯樣なる問題は殆んど考へられなかつた。ダルトン・プランの主張はこの點にも、一の大きな進歩を示したものである。

地理科に就きて研究せんとする時は、地圖や、寫眞や、その他地理的設備のある特別室にてすることが、如何に興味あり、且つ能率のあがる學習法であらうぞ。地理的雰圍氣の滿ちたる地理實驗室へ入るのみにても、學習の氣分をそゝるに十分である。

かくの如く、作業に適當なる環境を與へ、自己の問題を、自己の力にて解決せしむる事は、卽ち社會的活動の實驗を、學校にてなしつゝあることになるのである。

同じき實驗室にありて學習にいそしめる他の生徒達も、從來の學校組織に於けるが

如き相互相關せざるものではない。社會にありて協働的活動を營むと等しく、實驗室にありて、自己の事をなしつゝあるのである。

實驗室の設備は出來得る限り、上述の要件を滿たす樣にしなければならぬ。勿論、經費やその他の事情に依りて、理想的のものにする事は迚も出來ないのであらうが、敢て理想的のものでなくとも、ダルトン●プランの効果は十分に擧げ得ることが出來る。

實驗室に依る學校改造は、決して高價なる校舍や、又は特別に精巧なる設備を必要とするものではない。成る可く簡單に、且つ經濟的にすべての改造を行ひ、教師も生徒も共に利益を受くる樣の方案であり、又教師と生徒との無駄も最小限度にまで縮小される。

二、教育の生活化

教育の生活化と言ふ樣な事が大分喧ましく論ぜられて居る。成程從來の教育は餘り

に生活とは沒交渉なるものであつた。この缺陷を補ふべく、最も新らしき試みとして、學校を以つて社會的生活の實驗所なりと高唱したパークハースト女史の所說には、勿論大きな價値の含まれて居ることは、否むべからざる事實である。最も進步せる教育學說として、且つ實際案として研究しなければならない。

實驗と言ふことの眞義は上述せる所によりても略々知る事を得たと思ふけれ共、尙こゝには、エヴエリン●デウイ氏の說明を引用して置かう。曰く、

「學習者の見地から教育問題をつかまへることによつて、學校の問題を解決せんとする。而して、社會に出ては善良なる一市民たらんことがその理想であり、それがための實驗を學校に於てなすのである。學究の徒としての見地よりも、斯樣に市民として一人格を備へたるものたらんとする事は、この新教育方法の根本である。

かゝるが故に、學校に於けるすべての仕事は、兒童自身の要求によりてなされる。從來の如く、或る團體の兒童を對象として、既に決定せる事がらを、生徒に强制する

ものとは大分異つて居るのである。其處には唯適切なる環境があるだけで、如何にしてその環境に處するか、而して最後の結論に達するかは、全く兒童の自由に委せられるのである。」と。

蓋し、この環境に順應すべく、兒童自身の持前よりして、新らしき反應を生ぜしむべく努むるダルトン・プランは、兒童の性能を少しも顧みずして、學習作業を課したる、從來の教育的過程の誤より全然脱却したるものと言はなければならぬ。彼自身の方法と時間とにより、彼れの自然の欲求に對するやうに、彼に仕事を企てしむることは、環境に順應すべき能力の陶冶に與りて非常に力あるものと考へらるゝのである。

更らにこの兒童自身の作業と言ふことを、一般の社會的生活と言ふ見地より觀察すれば、其處には尚多くの意義と價値とが發見され得るのであらう。創造的活動、獨立自營の精神、これ等が社會的生活を營むに就きて如何に大切なものなるかは今更ら喋々を要しない。斯樣なる點に於ても、ダルトン・プランは社會的生活と學校生活とを

密接なる關係あるものとせんと欲するのである。

而して、ダルトン・プランのもとに學習を進むる兒童が、或る問題を解決せんとするに當り、教師の協力を求める事がある。この時に於ける教師の親切なる助力と奬勵、指導等は、社會的生活に於て、大人が他人の事業遂行等に對してとるべき態度と同樣なるものである。尚、兒童相互間に於ける助力や忠言等も、斯樣に社會的生活の見點よりすれば、餘程重大なる意義の含まれて居る事を見逃してはならない。

三、創造活動に依る文化の獲得

文化の向上は卽ち社會的生活の向上を意味する。それは文明の具體的に表現されたものとして、人類生活に於ては最も尊重すべきものなのである。吾々の生活理想も所詮はこゝを目指して進んで居るのに他ならない。而して、他の方面に於ては、文化の向上は社會的生活の安固をも意味する。文化の概要を知得する事が、社會的生活の安

固のためにも必要なことは言ふまでもない。

ダルトン●プランに依る教育は、斯樣に必要なる文化の概念を、兒童に得せしむるために、最も自然的な過程を踏んだものである。從來の學校教育は、この點に於てあまりに獨斷的であり、强制的であつた。故に、兒童の文化收得の過程は誤つたものであり、社會的生活の見解よりしての價値が少かつた。これに反して、兒童自身をして、自爲的に、自發的になさしむる工夫を指示したる所のダルトン●プランは、飽くまで兒童をして、自恃と獨創の精神を喚起せしめ、學校生活そのものよりして直ちに性格陶冶を爲さうとするのである。かくして陶冶されたる性格は、卽ち社會的生活を營む人類の一員として、最重要なる性格である。

斯くの如き、學校に於ける生活經驗より得たる能力は、或は兒童の向上力となり、智識の探究心となり、その他前述せるが如くに、後日眞に社會的生活を營まん時の能力や性格は陶冶せられる。

兒童の生活經驗！斯かる尊き事がらに對して從來の教育はあまりに冷淡であつた。あまりに無關心に過ぎた。然るに今やダルトン●プランのもとに於ける兒童は、自分の仲間達の間に立つて、自分自身の責任を自覺しながらも、將來社會生活に入りたる場合の、實業生活や職業生活に就いて、有つであらうと思はれると同じき協同關係—卽ち社會生活の經驗を學校に於て形づくる事が出來る。

從來の教育方法のもとに於ては、兒童の學校に於ける生活は、眞に自分自身の生活であるとは言ふ事が出來なかつた。其處には不斷の束縛があり、指圖があり、抑制があつた。その下にあくせくして居なければならなかつた兒童は、何としてもそれを以つて、自身の生活であるとは信ずる事が出來なかつた。從つて、生活に依る性格陶冶と言ふことなどは、殆んど夢想に近いものであつたのである。その結果に於ても、學校にて社會生活の準備をする事などは殆んど不可能であり、ダルトン●プランの如く兒童の生涯を通じて効果を與へ得る事は到底出來ない事であつた。

社會生活と學校生活とは同一のものであるとの見解を持し、社會的條件のすべてを學校に取り入れんとすることに根據を置いたダルトン・プランのもとに於ける兒童は、あらゆる方面に於て眞の自由が許される。學校生活は兒童自身の實生活の大部分に屬する。學校に於けるすべての問題は自身の問題である。勤勞に對する報酬、怠惰に對する空莫の念を自覺すること、その他の協同的精神、これ等の何れもが何等わざとらしき形をとることなく、行はれる。これ即ち學校の生活が、兒童自身の實生活に化したるに他ならぬのである。

自學自習と言ふ言葉が口癖の樣に唱へ出されてから、可なりに久しき年月は經過した。その自學自習は、女史の見解に依れば即ち自ら經驗する事である。前に既に述べたるが如く、この自から經驗することに依りて、文化獲得の道に進むのが、ダルトン・プランに於いてバークハースト女史が高唱する點なのである。自己經驗に依る文化獲得が、教育の目的である、と斯く論じて、更に、從來の教育も文化の概念は多く含まれては居たが、それを教師が兒童に傳達しやうと試みた所にその誤りがあつた。すべて文化と言ふものは傳達さる可きものではない。自から獲得し、自から創造すべきものであると、論及して居る。

女史の斯樣なる見解は眞にダルトン・プランをして價値あらしむる所以である。女史が、學校より全然「教へる」と言ふ觀念を除去して、「學ぶ」と言ふ觀念に代へたるも、實にこの自己經驗の原理より立せられたるものに他ならない。「學習は創造なり」との女史の言葉は、これを意味するのである。

四、學校生活の全改造

學校生活の社會化と言ふことは、斯くの如くにして、ダルトン・プランに於て見事に成功を見た。然し乍ら、熟つて考ふるに、教育上に於いてこの思想は決して新らしきものではなかつた。獨逸に於ける有名なるケルセンスタイナーの勤勞學校の如き

は、學校生活を社會化せんとする有力なる主張であつた。その他にも或は公民教育の主張も、それと同樣の意義を持つたものであつた。然し乍ら、それ等の主張は何れも學校生活の全體を社會化すると言ふ程大膽なものではなかつた。教科目の一部、例へば手工、實業科目等に限つて社會化しやうとする傾向であつたことは、殆んど否むことの出來ない事實である。バークハースト女史は、學校に於ける兒童の生活全體を社會化した。然してその實施に於て成功したのである。「學校生活の全改造である。」とは女史自らが、曾つてダルトン・プランを評した言葉である。

以上、私は大分長くに渉つて、女史の主張の根本である、學校生活の社會化、卽ち、社會的生活の實驗所としての學校の意義を論述した。これにて、バークハースト女史が學校に對して、略々如何なる見解を持して居るかが明らかになつたことゝ思はるゝのである。全く、ダルトン・プランのもとに於ける學校に集り來つた一群の兒童は、實驗所にありて、從來の教室よりもはるかに進歩したる、而して社會的生活の實驗所として完備せる所にて、極めて自然的なる、社會的協同生活を營むことが出來る。こゝに、社會人の一員として互に相談をし、忠告をし、その間に學習も完成すれば、又、將來社會的生活を營み得る人間たるの人格陶冶をもなすことが出來る。ダルトン・プランに於ける學校及教室は全く社會的實驗所（Sociological Laboratory）である。

第四章　ダルトン式學校の一日

一、第五學級兒童ホレース、マーシヤル

上來論述せる所に依つて、ダルトン・プランの原理とも稱すべきものは、略々明らかにすることを得た。以下の章に於て、私は主としてその實施方案を記述して行く考へである。實際に於て、兒童は學校にて如何なることをなすのであるか。それを最も

解り易く説明せんがために、Dalton Laboratory Plan に記載せられたる一文を引用する。これはホレース・マーシャルなる一兒童が、ダルトン式學校に於ける一日の活動を、最も具體的に説明せるものであるから、特にこゝに一章を設けて記述することにした次第である。詳細に渉つては次章以下に於て説明する。

ホレース・マーシャルは、ダルトン式學校に通學せる第五級の兒童である。

學校は午前八時四十五分に始まり、午後四時に終る。その間、一時より二時までは休憩の時間とせられる。午前八時四十五分より正午までは所謂自由時間（Free Time）である。この自由時間は全く兒童の時間であつて、その時間を如何なる作業に費すか、或は如何に利用するかは、兒童自身の責任である。即ちこの時間を如何なる科目の學習に費すとも、自由であるから兒童は、欲する實驗室に入りて、欲する作業に從事すれば良い。

正午十二時から零時半までの三十分は、兒童の集會、特別の仕事、各委員の會合等

に宛てられる。（著者曰、これは一日の中でも殊に大切なる時間であつて、學校に於ける兒童の社會的活動の模範的のものである。兒童相互の協同的活動も即ちこの時間に最も多い。）

この間に各學科受持の專門教師は一室に集まつて會を開き、兒童の能力等に就きて觀察せる所を話し合ひ、教師相互間の聯絡をとることゝする。次の三十分間は集團の會議に費され、討論やその他學校の問題に就きて各兒童が意見を發表したりする。この間に一級の兒童は各專門の教師に、自分のそれまでになしたる仕事を報告することになつて居る。而してこれは毎日異りたる教師にしなければならぬから、結局各級が各學科に就きてなすべき報告は一週一回といふことになる。

殘りの午後の時間、即ち二時から四時までは圖畫、手工、娯樂、競技、その他學級的集團の仕事として容易なるものがなされるのである。

學校に於ける學年は十箇月である。ホレースはその間に五つの主要學科、即ち、歴

史、地理、數學、文學、科學の一部を研究する、かゝるが故にホレースは一箇月に五つの契約仕事を持ち、一學年の間には五十の契約仕事を完成するわけである。この五科目の他に、特殊の學科として體操、手工、圖畫等の若干をやらなければならぬ。事情の許す限りはこれ等の學科も、前記五科目のものと同樣に、契約仕事として、各科特別の實驗室でなさねばならぬのであるが、これ等の教師が、或時間だけしか居る事が出來ない時には、この學科目は便宜上午後の集團でやるか、或は午前中の終りの社交時間（Socialized Time）になされる。

從來の學校であつたならば、ホレースは唯第五學年の教室で課業を受けるのみであるが、ダルトン・プランに於ては前記の各學科實驗室に入つて研究するのである。彼は机の代りに學用品を入れるために小さい箱を持つて居る。さうして實驗室に入れば、其處には彼れの同僚も居り、一教師に依りて特別に世話をせられる。その教師とは常に、その學級の計劃や或は諸種の問題に就て語り合ひ、彼等の日々の仕事に對し

て、集團として、或は個人として注意を與へ、助言を加へる。それからホレースも、その同僚も豫定案のカードを取り出して、その上に各學科の一箇月間になすべき契約仕事の詳細を記入するのである。

ダルトン式學校には時間割もなければ、ホレースを教室に出入せしむる鐘も鳴らされない。若し今日は地理をやらうと決定すれば、彼は直ちに地理實驗室へ行けば良い。實驗室での仕事は、時には參考書を讀むこともあれば、問題に對する答案を書くこともある。或は又地圖を描いたりその他地理に關した事は何でもやる。彼れは自分の仕事を何等他人を顧慮することなく獨りで遂行し、欲する時に、實驗室へ入り、又は出て行く。彼れが實驗室にて費す時間は全く、その興味のあるか又は疲勞せるか如何に依つて決定せらるべく、又同じ實驗室に誰れが居やうが、そんな事を顧慮する必要は少しもない。集團の間に於ては互に談話をなし、助言し合ふことは自由に許されて居る。書籍や書き物を交換し、互にその仕事を奬勵し合ふことも良い事とせられる。

若し研究中に解らない所や、解決の出來ない問題があつた場合、其他教師の助力を必要とする時は、何でもそれを記入して置く。午前中なれば、各實驗室にはそれ〴〵專門の教師が控えて居るのであるから、必要あらば何時でも行つてその助力を求めることが出來る。

教師は時としては集團を自分の所へ呼んで如何なる事をなして居るかを見たり、或は困難なる問題に就きて討究し、更らに良い研究の方法を指示したりする。

實驗室を出る前には、ホレースは、その時間内に完了したる仕事の量を教師の所持せる進度表(Subject Graph)に記入する。若し如何程なしたか疑はしきときは、教師に相談してその助力を求める。次いで彼れは自分の所持せるカード(Contract Card)へ線を引きて、自分の仕事の進度を一目瞭然たらしむる。若し實驗室を出た時が、未だ自由時間の終らぬ中ならば、彼れは更らに他の學科を撰擇し、その實驗室に入る。而して其處では前の地理實驗室に於ける と同じく作業をなすのである。

若しパークハースト女史の考へ通りにするならば、ホレースは午前中の終りの時間には、集團課業を受けなければならぬ。普通この時には、その前半は集會に費すか、或は彼れの興味ある學校の仕事をするか、特別の課業をするか、同學年の全體、或は一部の者と共に集團の仕事をするかして過ごす。後の半時間は、正常の學級教授を受くるか、又は集團の會議に費す。各學科に渉りて、この集團會議は一週に一回しかないものであるから、普通の時間の樣には輕々に過されないのである。パークハースト女史は、普通の復演や口演の時間と區別するために、これを「學級會議」(Class Meeting or Conefrence)と稱して居る。この時には教師より兒童に對して、學科に關する兒童の經驗以外の事や、兒童が僅かな設備や時間では發見する事の出來ぬ事項を提供したり兒童のその學科に就いての實際の議論を指導したり、豫定案を檢査して批評したり、總括したりするために、十分なる時間を要する。

午後の時間は午前中とは異つて最つと規則正しき時間割に依つて行はれる。體操、

娯樂、音樂、或種類の實業科目、主要なる割烹術等の如き、集團課業に適するものを、それ〴〵その伎倆に應じて、やらしむる。

かやうに午後の一部は時間割に依つて行はれるのであるが、一部は又、圖畫、手工等の自由研究にすることもあり、又は全部その級の、一週一回の主要學科に關する復演に費されてしまふ。米國に於ける復演（Recitation）と英國に於ける口演（Oral Lesson）とは同樣な性質なものである。

さて、右に述べたるが、ダルトン式學校に於ける兒童の一日の作業の概要ではあるが、これは唯一例を示したのみであつて、勿論、何處にてもこれと同じきものであると言ふのではない。次に、最一つ、實例を示して本章を終らうと思ふ。

二、英國ステプニー學校の一日

英國のローズ嬢は、最近（一九二二年十二月）「ダルトン・プランの一日」と題して、

大要左の如く、その經營せるステプニー・ジウイシ・スクール（Stepney Jewish School）に於ける實施の狀況を說明した。同校にては、上級だけにダルトン・プランを實施して居るとの事である。而して女子のみを收容せる學校である。

兒童は九時少し前に學校へ來る、こゝでは十時より正規のダルトン式作業が初まるのであるから、それで良いのだ。自分がなさんと欲する敎科目の豫定案を携へて學校へ來る。十二時までは卽ち自由時間と言ふことになつて居る。學習に必要なる研究資料、書籍類の如きは、學校にて各兒童が得ることが出來る。兒童の中には、自發的に家庭にありて學習をして來たものもある。それ等の家庭課業は、學校へ來れば、それぞれ自分の級の補助生――敎師を補助するものと言ふ意味にて、敎師の代理となりて、自分に能ふ限りの範圍にて、兒童に助力する、從來の學級組織のもとに於ける級長の如きものである――に提示して、その批評を求める。一級にはこの補助生が六人居るのであつて、各その得意とする學科を受持つ。兒童より家庭課業の提示を受けたる時

は、その補助生は、それを認めた證として、署名をすることになつて居る。若し兒童の作業の中に何等かの缺點があるとか、特別に注意すべき事項を發見したる時は、その點を指示して、兒童の注意を喚起する。補助生の檢閲を受けたるものは更らに教員に渡されて、教員からも尙いろ〳〵の點に就きての指示を受ける。

十時が鳴ると、宗教上の訓戒があつた後に、各兒童は自由に實驗室へ入る。其處には、その科目の研究に資するための各種の資料、參考書が備へられてある。教師は、必要あらば各兒童の所持せる學科表、即豫定案を檢閲し、若し兒童が、各學科の學習に要する時間の配當等に關して困難あらば、それ等に對しては適當なる助言を與へる。

若し一兒童が何か論文でも草せんとする時には、それに關する參考書を讀み、教師よりの注意ありし點をも考へ、自からそれまでに集めたる資料等をもとゝして、一文を書き上げて、而してそれは補助生の所へ持ち行く。補助生と協力して、明らかな缺

點等は訂正する。

數學の問題を解くには、數人一團となりて、互に助力し合ふと言ふことが良く行はれる。集團課業を受くることも多い。

若し撰びたる科目が歴史であつたとすると、兒童は指示されたる箇所を歴史の教科書中より讀みて、問題に對して答案を作るのに、二人若くは三人が協力してなすことを補助生が承知したならば、各兒童はそれ〴〵異りたる書物を讀み、それを互に參照し合はせて、問題の解答を作る。補助生はそれを讀みたる上、教師に渡す、教師はそれを見ながら簡單な質問を發して、それに答へることの如何に依り、書かれたる答案の價値を一層明らかに知ることが出來る。

兒童が斯樣にして自由研究の時間を過しつゝある間に、教師は又種々となさねばならぬ事が多い。研究中の兒童にして、若し困難なる問題に遭遇したる時は、教師の許に至りて助力を乞ふのであるし、數人のものが、同一の問題に關して困難を感じて居

る時には、教師はそれ等のもの一同を、自分の周圍に呼び寄せて、一緒に助力を與へる事とする。或はその他に絶えず豫定案の作製や何かに就いて心配して居なければならぬし、補助生のなしたることも見てやらなければならぬ。殊に最も注意すべきは、補助生自身の學習作業に就いてである。補助生は普通の兒童の作業を見なければならぬと言ふ責任を持つて居るものであるから、自身の學習に關しては、教師より餘程注意してやらなければならぬことだ。

その他に、集團教授の樣式にて口演をやらなければならぬのでもあるし、いろいろと割合に忙しいものである。

午後には少くとも一回の口演がある。それは「ダルトン化せられたる」(Daltonized)科目に關してするのであるが、文學的作品の鑑賞と言ふが如きことは、矢張り口演課業の一つであつても、兒童が裁縫の如き手技をなしつゝある傍らに於てなすこともある。

歴史及び地理の口演時間には、兒童自からの力にては困難なりし問題を、明瞭に解決して兒童に示し、尙將來の研究上に必要なる暗示や、指示を與へる。而して又、人物及事件等に關して種々の討論をなすこともあるのである。

右がローズ嬢の實施せる概要であるが、これ丈けでは記述が簡單過ぎるために、中には或は了解し難い點もあらうと思はれるけれ共、尙以下の記事を讀まれたならば、不明なる箇所も自ら明かにせらるゝであらう。

要するにダルトン・プランの實施方案は、決して一定せるものがあるわけではない。右述べたるもの以外に、諸處の學校に於て實施せる方案を記述すれば、種々と異つたものもある。けれ共それを一々こゝに擧げるのは煩はしいから略して置く。尙、後章に於て「歐米に於ける實施の狀況」と題して、實際の方法を記述する考へであるから、それをも參照いたされたい。

アダムス教授（ロンドン大學教授）は曾つてダルトン・プランを評して、その彈力

性（Elasticity）に富めるが特色であると言つた。卽ち學校の事情、或は地方の狀況、兒童の性質如何等、時又は處を異にし、事情を異にするものに、それ〴〵それに適應する樣に實施する事が出來ると言ふ點である。だから、ダルトン・プランを實施し、經驗せる者はみな、「採用して最善と信ずる樣に適用せよ。」(Adopt and adapt as you think best.）と言つて居る、

實際にこの通りで、英米等に於ける實施の狀況を見ても實に千變萬化と言つても良い程である。勿論、その根本思想に於ては何等異つたものがあるわけではないが、斯樣に實際に適用するに就いて、種々の方法の講ぜらるゝことは記憶して居なければならぬ點である。

第五章　學級組織の改革

一、個別教育と團體教育の調和

從來の學校組織に於ける學級制度には、種々の缺陷が含まれて居たことは、明白なる事實である。近來に至つて、一層强烈なる叫聲となつて現はれたる、劃一主義の打破、個別的取扱の高唱の如きは、言ふまでもなくこの學級組織の弊を革めんとして、主張せられて來たものに他ならない。

然しながら、個別的取扱を高唱する論者は稍々もすれば、その極端に走せて、團體的取扱の美點長所をも沒却しやうとし、却つてその反面に於ては個別的取扱の缺點を助長する樣な傾向がないこともない。教育實際家はこの點にも深き注意を拂ふべき要がある。

個性、能力を異にした兒童に對して、一齊的教授をなすの無暴なるは明白なる事がらである。然し乍ら、個別的取扱の極端に走せたるの弊として、社會的生活上に最も

重要なる共同生存に關する道德の陶冶を忽せにし、或は放縱不規律の性格を形成することゝもなる。

教育上の實際問題として、この個別的取扱と團體的取扱の調和といふことは、久しき間、識者の考究しつゝあつた問題であつた。然しながらそれは難問題たるには相違なかつた。

蓋し、前章にも縷述せるが如くに、社會生活は、各人皆一個の人格體としての集合なるが故に、他人を自己の方便として取扱ふことを許さず、自己の權利、自由を主張する一方に於ては、他人の權利、自由をも認めざるべからざるものである。この、社會生活の重要道德たる協同、團結の德を養成すべく、從來唱へられたる、個別的取扱論者の主張には少からざる缺陷の認めらるゝのは遺憾なる事であつた。

教育の理想は、各個人の個性、能力は飽くまでも自由に發揚せしむると共に、社會的生活を營める一員としての資格を備へしむるにある。それがためには、個別的取扱

團體的取扱の兩極端に走せず、その缺點を除き、長所、美點を互に調和せしむる所にある。

ダルトン・プランは、從來の教育が難問題としたるこの點に解決を與へたるものである。學習に於ける兒童の自由活動を許して、恣にその能力を伸ばさしめ、個性を束縛するの弊より脱したるは、眞に兒童の樂園を現出したるものであつた。而かもその一方に於ては、社會的生活の一員たるの自覺を養成することは決して忽せにすることなく、學習の際にありても飽くまでも相互の助力、協同的精神を陶冶せんとしたるは、完全なる一市民を養成せんとする實際的方案として、最も進歩したるものと稱すべきである。

斯くして、ダルトン、プランは從來の學級組織に對して大膽なる改革を試みた。殆んど根本的の改革を實行したのである。

二、學校に對する觀念の變更

從來の學校に於て、學級（Class）と呼ばれたものは、ダルトン、プランでは實驗室（Laboratory）と改稱せらるゝことになつた。何故實驗室と呼ばるゝ樣になつたか、その理由は第三章に於て詳論したから、こゝでは述べない。

生徒の學校に對する觀念、或は學校に對する態度等は、これも根本的に改められなければならなかつた。

從來の教室は、生徒が單に教師より教授を受くる場所に過ぎなかつた。それ以外に何等特別の意義も價値も認められざる建物であつた。生徒は或一定の時間を限りてその中へ閉ぢ籠められ、その意に反していろ〳〵の事をなさねばならなかつた。現在、自分がなしつゝあることに就いても、兒童の自由意志は殆んど認められなかつたと言つても良い程であつた。或る學科の研究中、興味が湧いて、益々學びたいと言ふ心が起

きて來ても、教室より兒童を追ひ出す鐘の鳴るのをどうすることも出來なかつた。

三、質問教式の發展

輓近に至りて自働教育が高唱せられ、兒童の自發活動に依る教育が重んぜらるゝ樣になつてからは、教室の空氣も稍々緊張を見る樣になり、その昔ヘルバルトの五段教授が盲目的に學校に行はれた時代とは、大分相違を見る樣になつたものゝ、今までに行はれて居たものが眞の自働教育であつたか、兒童自からの創造的活動に依る教育であつたかは頗る疑はしい。

自學主義の教育法では、兒童の質問と言ふことを非常に重んずる、言ふまでもなく、兒童に質問せしむることは、自發的活動をなさしむるに都合の良いものである。然しながら、兒童の質問そのものが、眞に兒童の內部的要求より出でたるものでなければ、質問の價値はなくなる。從來の教授に於て、例へば讀本を先づ兒童に讀ましめて、「分

らない所はありませんか。」と、教師より質問を要求する。兒童はさし當り、解らない新語句などを質問して解答を求める。こんな催促に依る質問が、眞に兒童の内部的要求より出でたるものであるか、頗る疑はしいのである。

ダルトン、プランは質問的教式を非常に高調したものではあるが、斯樣な從來の方法とは全く異る。

學級を改革して、實驗室とした。その實驗室には多くの兒童が、それ〴〵自己の欲するがまゝに研究して居る。或者は辭書を引いて不明の語句を解釋せんとする。他の者は參考書を取り出して自己の研究上必要なる箇所を參照して居る。その他、實物に依つて研究して居るものもあり、實驗に訴へて問題を解決せんとして居るものもあらう。さうして各自に研究して居る中に、どうしても自分の力にては解決すること能はざる問題に逢着する。斯樣な問題は、眞に兒童自身の問題である。それをどうしても解決しなければならぬと言ふ内心の欲求は、自分が發見した問題に對するだけあつて、

非常に強烈なるものである。その解決の相談を教師に對してなすといふのが、卽ちダルトン・プランが質問的教式を高調せるものであるといふ所以である。

四、ダルトン・プランと教師の責務

右述べたるが如く、ダルトン・プランにありては實驗室は卽ち眞に兒童自身が學習する場所であり、教師は從來の學校に於けるが如く、單に教へるのではない。兒童のなす所を觀察するものであり、又補導するものである。

兒童が實驗室にてなすことは、第三章にて詳論せる樣に、社會生活の實驗である。つまり教師はその觀察者であり、指導者であるといふわけである。

輕卒なる論者は、ダルトン・プランは教師の任務を非常に輕減するかの如くに言つて居る。成程、兒童が自からなす所を見て居る丈けであるならば、教師の仕事は從來の教授よりもはるかに樂なものとなるであらう。けれども、觀察者として、兒童の長

所や短所を明らかにし、それ〴〵の者に對して適當なる環境を與へ、指導者としては各生徒の質問に應じ適切なる指導を與へるといふことは、仲々一通りの苦心ではない。

今まで唱へられた自學自習主義の教育に對して惡口を言ふものは、兒童の自學自習は要するに教師がサボる爲めの口實に過ぎないとした。成程、誤られたる自由主義や自學主義は教師がサボるための口實にはなるかもわからないが、ダルトン・プランでは斷じて斯樣なる事は許されない。

各兒童に對して適切なる環境を與へんとするには、深き心理學の知識を要する。兒童の內部的要求より來る質問に對して、滿足なる解答を與へんとすれば、學科に就て深き素養がなければならぬ。豫定案の作製や、兒童の作業を檢閲しなければならぬ勞務や、それ等は何れも、日夜教師の心を勞しなければならぬ事がらである。

右を見ても、ダルトン・プランが決してサボるための自由主義でないことはわかるであらう。

五、兒童の對教師觀訂正

尙、本章を終るに當り一言すべき事は、學級組織の改革に伴ふ、兒童の對教師觀の訂正である。前述せる通り、兒童は種々なる參考書をも讀み、從つて問題も多く、諸種の質問を教師に提起する樣にもなるのである。故に教師はこれ等の質問に對して一々的確なる解答を與へることが出來ない樣にもなる。依つて初めてダルトン・プランを實施した時などに於ては、この點にも教師は餘程心して居なければならない。兒童の如何なる質問に對しても明答し得る抱負を以つて、絕えず勉學を續くると共に、若し解答し得ざりし場合がありても、それを以つて決して教師の威嚴を損ずるものではなく、教師とても何でも知つて居るものではないと言ふことを、兒童に悟らしむる必要がある。

すべての學問が日進月歩の今日、何でも知る事は到底出來得べきことでもなく、又

そんな必要は少しもない。唯、教師は指導者、觀察者としての任務を盡くす樣に心がけて居れば良い。兒童の學習動向を誤らしめぬ樣に、細密の注意を加へて居れば良い。すべて、智識の探究には、自からの能力に賴るより他に手段なきことを悟らしめ、自己教育の眞義に徹せしむること――之れがダルトン・プランの理想に他ならない。

ダルトン・プランが學級組織を改革した理由も、如上の見地より來りたるものである。

六、ダルトン・プランに於ける學級教授

尙、こゝに注意すべきことは、ダルトン・プランは學級を全然廢止したと言ふわけではないといふことである。前章に叙述せるを見ても解る通り、從來と同樣なる學級教授も、一日の中の午後には行はれる事になつて居る。これは如何なる意義を持つて居るかと言ふに、

一、兒童自からが解決することの不可能なる共通的の問題を、解決すること。
兒童が各個別的に研究せる中の難問は、矢張り質問等に依り個別的に解決する。然しながら、中には到底兒童の力には及ばざる共通的の難問題に遭遇することは決して尠からぬ。かゝる時、それを一々個別的に取扱ふよりも、團體として教師より說明してやることがはるかに良いわけである。

二、將來の研究上に就きて何等かの暗示を與へること。
將來に於て遭遇すべきことを豫想せらるゝ事項に關して、或る暗示を與へる。之れは必ずしもヒントでなくとも、都合に依りては明示を與へても良い。要は兒童をして環境に順應すべき能力を得せしむるといふことにあるのだ。

三、一齊的取扱に便利なる科目あること。例へば競技、體操、音樂等の如きものである。勿論之等の學科と雖も、個別的指導の必要なるは言ふまでもないが、他の科目の如くには、全く個別的にはやることが出來ないものだ。之等に對して

は卽ち從來の學級教授式の方法が行はれるのである。

四、團體訓練に資し、個別的取扱の弊を除くこと。

既に本章の初めに於て論ぜるが如くに、個別的取扱に偏する時には其處には自ら缺點が生じて來る。ダルトン・プランに於て學級教授を全然廢止せないのもかゝる理由に基くのである。

要するに、ダルトン・プランは個別的取扱と團體的取扱の兩者を程良く調和し、双方の缺點を除きその長所を集めたものと言へやう。

尙、實驗室に關する實際的研究は、後章に於て說明する「實驗室の準備」の章を讀んで頂き度い。

第六章　時間割の束縛より解放

一、經驗的自由と時間割

勝手氣儘の自由ではない。他人と協力して公共善のために盡くさんとする、調和的な、責任感の强い人を作らうとするのが、前にも述べた通り、ダルトン・プランに依る教育の最終目的である。この最後の目的を達せんがための手段として、經驗的自由は尊重すべきものである。理想的自由は、教育の目的としては甚だ尊ぶべきものではあるが、それまでに達するためには、エネルギーの釋放と言ふ意味に於て、經驗的自由を重んぜなければならない。

然るに從來の學校教育に於て、この經驗的自由が果して幾許の程度に許されたものであらう。こゝに於て私は『時間割』なるものがあるを思ふのである。それが如何程に自由を束縛して居た事であらう。

ダルトン・プランは兒童をして時間割の束縛より全然解放したものである。

從來の時間割といふものは、全く兒童の性能の差異を認めず、兒童心理學の原理を無視せるものであつた。勿論、その作製に當りては、學習に困難なる科目は成る可く午前中にして、兒童の心意活動の著しき時に學ばしむるといふ樣に、或は各科目の組合せ法を如何にするか等と、多少兒童の心理を顧慮した點がないわけでもなかつたが要するに兒童は少くとも數十人である。それに對して固定せる時間割は唯一つしかない。而かも兒童の心意は時に依りて、その活動狀態を異にする。それだのに時間割は一年を通じて毫も變化を見せない。かゝるが故に、時間割の作製に如何に苦心したとて、結局は兒童の心理を無視せるものにならざるを得ないのである。

ダルトン・プランはこの點に一大改革を試みた。時間割の代りに『作業の豫定案』(Assignment)といふものを作製して、各兒童に所持せしむる。(アサインメントは『割り宛て表』と譯して居る者もあり、『指導案』と言つて居る人もある。私は最初豫定案と譯した關係から、本書では矢張りそれにして置かうと思ふ。)豫定案に關する說明は

後章に於て詳しくするつもりであるが、こゝに簡單に說明すれば、卽ち兒童と敎師との作業の契約であつて、兒童が一ヶ月間にはこれだけ、一ヶ年間を通じてはこれ丈けの仕事を仕遂げるといふことを、敎師と約束をしたものである。それに依つてすべての學校に於ける作業は進めて行く。要するに一ヶ月間には、それ丈けの分量を仕遂げれば、それで良いわけであつて、如何なる手段を用ふるか、どれ程の時間をかけるかのことは、全く兒童の自由撰擇に委するのである。

時間割の全廢と言へば、人々は直ちに想像するであらう。時間割に依つて規則正しく學習して居てこそ、學習の能率も擧がり、効果も多いのに、さうでなくては、自然とダラシなき態度になり、正則の學習などは出來なくなるであらうと。

眞に然りである。この意味に於て、時間割も必要なるものである。然し乍ら、社會的生活に於ては、各自のなすことに就きてはもつともつと自由が許される。さうして價値あり、意義ある仕事がなされる。この點に注目して、時間割を廢し、それよりも

はるかに、兒童の自由活動を許す豫定案に代へたのは、ダルトン・プランをして益々價値づけしむる所以である。

二、兒童の自發的興味

自發的興味は強いられたる興味よりも、研究と創造とのために大なる刺戟となるものである。或意味に於て論ずれば、強いられたる興味は殆んど教育的價値はないとも言へる。自發的興味よりして、獨創的努力の如き、人格的力となるべきものを陶冶することが出來る。要は如何にしてこの自發的興味を喚起すべきかにある。

兒童の興味と好奇心とが自ら湧く樣に、學校に於ける生活環境を定めることは、勿論その一要件である。これがためには從來の教室を改革して實驗室とした。實驗室とは要するに、學習に最も適當なる環境を作らんがために考案せられたものに他ならないものだ。けれ共、單に環境の整理のみにては、眞に兒童の自發的興味を惹起し、自

發的研究に向はしむるに足りない。更らに進みて、自己の力にて環境を統轄することが出來なければならない。

かゝる目的のために、時間割の代りに、豫定案を作製して、それに依つて自から學習せしむる樣にしたことは、自發的興味に依る創造的活動を營ましむるに與つて大なる利益あるものと言はねばならぬ。

自發的興味とは決して訓練のなき、我儘なる衝動ではないことを注意しなければならぬ。前述の通り、この興味は兒童が學習研究の雰圍氣につゝまれ、經驗あり計劃ある教師の指導のもとにありて初めて發達し得るのである。實驗室の考案と、豫定案の作製とは、この意味に於てその價値の認めらるべきものだ。

ダルトン・プランは「生活によりて陶冶せらるる」を目的として居ることを前に言つた。自發的興味にもとづく創造的活動は、卽ち兒童の生活そのものである。學校に於ける生活がかくの如きものであるならば、その兒童の性格に及ぼす影響も蓋し大な

るものであらう。

從來の教授上にても、兒童の自發的興味とか、創造的活動とか言ふものは決して閑却されて居たわけではなかつた。けれども、何分數十人に對する一齊的取扱と、活動寫眞のフィルムの樣な長短伸縮なき時間割との制限は、思ふ存分に兒童をして創造的活動を營ましむるの餘裕を與へなかつた。

それで、例へば歴史の時間であると、先づ兒童に學習問題を發見せしむるために、「今日は是これの題目に就いて研究するから、本を讀んで若し疑はしい所があつたら質問しなさい。」と言ふ樣な態度に出る。かうして兒童に下調べをさして見ると、活動性のものゝ二三は勿論何かの問題を捉へることが出來る。而して教師に對して質問して來るであらう。けれ共他の大部分の兒童は我不關焉として居るのが普通である。

或は又、「この時間には如何なることを學びたいのであるか。」と言ふ樣な態度にて兒童の欲求を聞いて見るとする。無論いろいろな要求は提出せらるゝであらう。けれ

共各異る要求を一時に滿たすと言ふことは絶對に出來ない。その中の一つが撰ばれて決定せらるゝことになる。さうなつて見れば、これは自由學習の樣には見えても、その實は或る限られたる兒童の欲求を全兒童に强制するものであつて、毫も自由學習と言ふ可きものではない。

ダルトン・プランでは、生徒は學習時に於ける身心の狀態により、自分に最も適したる方法を以つて學習して行くのであるから、眞に自發的興味と內心的欲求に基く學習ともなり、意義ある創造的生活ともなり、學習そのものに依りて生活經驗が得らるるわけである。

三、私の經驗を

從來のまゝの學級教授を行ふにしても、現今行はるゝが如き固定せる時間割は甚だ有害なものである——私は常に斯樣な考へを持つて居た。

教授に油が乘るとは良く言はれる言葉である。歴史なり地理なり、その他如何なる科目の學習にしても時と場合とに依り、所謂油が乘る時と然らざる時とがある。一齊教授に於ても、兒童の學習氣分が緊張し、時間の經過などは、全く忘れてしまふことがある。けれ共矢張り時間は正直に經つて行く、教師も生徒も興味の中心にある時、その教授を終らしむべき無情なベルが鳴る。如何に中止するのが惜しいと思つても、それはまゝにはならぬ。名殘惜しく教室を離れなければならない。

それとは反對に、全生徒は興味のない學習を強制されねばならぬことがある。重苦しい空氣は教室を壓して居る。生徒の顔も晴れ〴〵しくない。先生の顔も曇る。それでも一時間の經過を長く待たなければならぬ。教室より解放するベルの鳴るのを聽いてほつと一息つく事がある。

右は私の經驗中にて、日常繰り返した事實であつた。私は成る可く時間割に束縛されない樣に努めたものであつた。

理科の時間である。化學的の實驗を生徒一同共になすべくいろ〳〵と準備をする。實驗中豫期せざる事に遭遇し、思はぬ興味をも沸かす。時間は容赦なく進む。實驗すべく豫期せる事項の半分も出來ざる中にベルの音を聞かなければならぬ……そんな時には私は良くブッ通しに理科を續けてやつたものであつた。歴史も地理も興味の行くがまゝにやつた。

或人は評して言ふであらう。最初教授の案を立てる時にちやんと一時間で終了する事が出來る樣にして置かなかつたからいけない。豫期の時間に終ること能はざるは要するに教授の術に拙なく、未だ經驗の淺き故であると。

けれ共、學校生活の社會化、生活經驗による性格陶冶と言ふ事を考へる時、どうして斯くの如き事が言へるのであらうか。

私の經驗によれば、學級教授に於ても時間割は不適當なものである。然しながら現今の學級組織のまゝでは、如何に時間割の事を云爲しても、それだけでは決して兒童

の個別に應ずる樣なものゝ出來る筈はない。

ダルトン・プランは、兒童の一人々々にそれ〴〵適當なる時間割を持たしむることに就いて工夫したものである。卽ち一人一時間割と言ふ案であるのだ。

四、性能の差異と時間割

前述の如く、ダルトン・プランが各個人別に時間割を制定する案を實施したのは確かに卓見であつた。この時間割は豫定案と稱せらるるものであることは曾つて說明した通りである。

言ふまでもなく兒童はそれ〴〵心身の能力に差異がある。或者は智識的敎科に優れ或者は技能的敎科に得意であらう。或は思考學科に長じ、或は藝術學科に深甚の興味と才能とを有つて居る。同じく思考學科に長じて居るものであつても、或者は分析的能力に優れ、或者は綜合的能力に傑出する。心理學の指示する所によるも、或は日常

兒童に接して觀察するも、各兒童の心的活動の步調は同一でないことは明白である。

かくの如くに心身の能力を相異にした者に對して、一定の時間に一定の學科を、而かも一樣の方法に依つて敎授する時間割的の學習は、如何なる生徒に對しても、その內心的要求に應ずる事の出來ないのは當然である。優等生は旣に自分が知れる事を學ばざる可からざること多く、その結果として學習に何等興味を覺ゆることが出來ない劣等生は理解し能はざる事を無理に强ひられ、他の者に伍して行かなければならない。

かやうなる無理のなき樣にし、各自の步調に適應したる速度で步ましめ、以つて目的地に到達せしめやうとするのが、ダルトン・プランの方案である。

故に、ダルトン・プランによれば、例へば算術に得意なるものは、速かに濟ませて自分の不得意な國語の方へ、餘りたる時間を廻す。結局自分に最も適當した速度の步調で學習し得るわけであり、時間を經濟的に使用することゝもなつて、好結果を來す

のである。

又、同一の兒童であつても時によりて、その心意活動に大差ある事實は、日常親しく兒童に接して居る者の理解し得る所である。又この事實は、自己の內心を反省して見ても容易に肯かれると思ふ。何故に斯く、時によりて差異あるかは、無論種々の事情によるけれ共、要するに環境の影響と言ふ事に歸着するのである。

人の心程その周圍の事情に影響せらるゝものはないであらう。殊に大人よりも兒童にありてはそれが甚だしいのである。それがために心意活動の方向は必然的に異るものとなる。

これが解り易き實例を引用すれば、例へば夕べ活動寫眞で、南米ブラジルに於けるコーヒー採取の實景を見た。日本移民の活動狀態も親しく目の前に見せつけられた。自分は今丁度ブラジル國の地理に關して學習しつゝある時である。最つと詳しくいろ〳〵な事を調べたい。とかやうにブラジルの地理を研究したいと言ふ興味はまさに絕

頂に達して居る。けれ共學校へ行けば、時間割が地理を學習するの自由を許さない。兒童はいや〳〵ながら國語をやらなければならぬ。或は修身のお話を聞かなければならぬ。けれ共かやうなる心理狀態では、他の事をやつても少しも興味は起らず身が入らない。結局その兒童は一時間を格別に得る所なく過ごすと言ふ事になるのである。

兒童の內心的要求のなき所に與へることは愚の至りである。而かも現今の敎育は、かゝる愚を敢て繰返して居るのではなからうか。

ダルトン・プランによれば斯樣なる學習上の不經濟は毫も認められない。

水を飲まざらんと欲する馬を、無理に河邊へ引き行きて、强いて飲まさんとしてもそれは徒勞に歸する。兒童の欲求なき所に强いて與へんとするは、これと同じく何の效果をもたらさないであらう。

五、誤解されたる興味

兒童の欲求なきに強いて與へんとしたる從來の教育は、隨分無理な事をしたものである。本來は兒童に何の興味もないものを、無理に興味あらしめやうとしたから、教授の術とか管理の方法とか言ふものが教師の方で案出せられる。彼れは教授が巧妙だと言ふ批評は、彼れは興味を兒童に強うる事が旨いと言ふことゝ同じ意味であつた。面白い、教授をして兒童を飽かしめない事の巧みな教師は、直ちに教授が巧妙であると批評せられた。

けれ共、これは教育の眞義に徹せざるものゝ言ふ可き言葉である。かやうに低級なる、且つ強いられたる興味に何等の價値があるか。技巧の末に墮したる教授術に何の權威があるか。

ダルトン・プランはこの誤まられたる興味の弊より全然脱却したるものである。もはや教授の技巧を云爲する必要はない。生徒をダレさしめない工夫に心勞する必要もない。

こゝまでに叙述せる所によりても明らかなるが如くに、ダルトン・プランの興味は兒童自身の興味である。即ち自發的興味である。兒童自からが求むる所のものである。

從來の教育に於ける誤れる興味の觀念を一掃し、眞の意義の興味の上に立ちたる、ダルトン・プランは、水を飲まんとする馬を水邊へ導く教師を必要とする。

第七章　實驗室の準備

一、實驗室の要件

以下數章に渉つて私はダルトン・プランの實施的方案に就きて述べる。而してその述ぶる所、必ずしもダルトン・プランそのものゝ飜譯ではないから、英米等に行はれ

る所を紹介すると共に、又我國教育制度のもとに於て如何にして實施すべきかと言ふことは常に念頭に置くのである。

ダルトン・プランの實施に關して、その中心問題となるものは何と言つても、この實驗室の準備と、他は豫定案の作製に關する問題である。

社會的生活を實驗せしめやうとし、從來の教室を改革して、學校生活卽社會生活の理想を實現せんがために、こゝに實驗室とすることになつたのである。

ダルトン中學校々長ジャクマン氏がダルトン・プランを採用するに至つた動機も、從來の教育が社會生活とは甚だ緣遠きものなりし故に、何とかして學校と社會とを打つて一丸とする方法はなきかと苦心した所にある。

實驗室は卽ち兒童の學習室である。兒童の生活せる社會である。ダルトン・プランは如何なる實驗室を理想として居るのであるか。これを一言すれば、卽ち學習研究に最も良き環境を與へらるゝことこれである。

實驗室が眞に兒童の生活環境であるならば、それは不斷に兒童の心身に影響を與ふるものである。否、ダルトン・プランでは、不斷に影響を與ふべく設備せられて居るから、實驗室と稱することになつたのだ。

で、兒童の生活のために、良き環境を作らんとしては、先づ次の如き設備が必要であらう。

一、參考書類をなるべく多數に備へて置くこと。

二、諸種の實驗用具、實物標本等も出來得べき丈け多く蒐集して置くこと。

三、從來の學級に用ひし如き、一人用又は二人用の机、腰掛等の他に、五六人共同にて用ふるを得べき椅子を、一實驗室に少くも五脚位は準備すべきこと。これはダルトン・プランの所謂小團課業のため必要なものである。ダルトン・プランでは、單獨にて研究することをも奬勵すると共に、數人の小團にて相互に協同研究をする事をも推奬する。それがためには、この大なる卓子は是非共無くてはなら

ぬものだ。

四、椅子もなるべく數多くのものを、前記の大卓子へ附屬せしめ置くこと。

五、參考書、その他各種の研究資料の類は各科實驗室に分配して集中制をとらざること。

從來の教室は直ちに實驗室に改むる事が出來る。如何なる程度に改むるかは時と場合とに應じて顧慮すべく、唯、あまりに急激なる變化は良くないと思ふ。愈々ダルトン・プランを實施する事になつても、急激に改革する時は、効果を擧げる前に失敗が先き現はれて來るものである。

二、實驗室主任の教員

ダルトン・プランは各學科共專科教員に依つて指導せらるゝのを原則とする。但し、學級と言ふ團體はその儘保存してあるから、その主任はそれ〴〵別に決つてあるわけ

である。

近頃は我國の小學校に於ても、學科受持を主張するものが次第に多くなつた樣である。而して殆んどそれを實行して居る所をも私は二三觀もした。ダルトン・プランが專科擔任制であることも、まことに意味深い事がらである。眞に學習の指導をしやうとするならば、どうしても指導者がその科に對して深い研究がなければならぬ。その理由は敢て詮穿するまでもなく、實際教育家の日常經驗する所である。圖畫の巧い先生に教へを受ければ、兒童は何時の間にか繪が巧くなる。歴史に深い造詣があれば知らず知らずの間に、歴史に興味を有する兒童を作る。

輓近の學科受持制の主張は全くかゝる根據の上に立ちたるものである。ダルトン・プランが專科教員を要求するのも同一の理由に他ならない。

ダルトン・プランに於ける實驗室主任の教員は、自由學習時間の中は何時でも實驗室に控えて居るのである。而して不斷に兒童の學習指導に心勞する。

一般に實驗室に於ける主任教員の任務は左の如きものだとぜられて居る。

一、實驗室の空氣をして自由學習の氣分横溢せるものとする樣に、始終注意すべきこと。

二、「豫定案」に關する疑義なき樣詳細を說明し、若し疑義あらば十分に正し置くこと。

三、參考書を調べる方法、實物の取扱方、實驗を要するものはその注意及方法、その他研究資料の利用法に關して注意すること。

四、特に困難なる問題にして、その解決に苦しみ居る樣なものに對しては多少の暗示を與へ、指導に注意すること。

五、一般に困難を感じて居る問題があらば、それに對して十分に說明を加へ、或は實際の必要が起らば或點だけ全部說明して、それがその問題の一般原理とどう言ふ關係があるかを明瞭に知らしむること。

六、隨時兒童の相談に應じて適當の指導を與へ、又は誤謬を訂正したり、成績の考査をしたりすること。

右述べたることが卽ち前に言ひたる、兒童の觀察者、指導者として、自由研究時間になすべき敎師の任務である。これ以外に、ダルトン・プランでは、午前中に學級敎授をやることはない。

三、實驗室に於ける注意

實驗室にありては、各兒童は自由に自己のなさんと欲することをなしつゝあり、されど全く我れ單獨に非る事は、何時も腦裡より忘れ去る可からざる事である。既に幾度か繰返したるが如く、この際に於ける兒童等の團體は卽ち社會的のものであつて、決して各自が全然個別になつて居るものではない。

この社會的生活と言ふ意味よりして、實驗室內にも自ら一種の不文律が生じ來り、

兒童はそれを守らざるべからざるに至るものである。ダルトン・プランは自由を原理とせる主張であるけれ共、決して勝手氣儘の自由を許さないことはこれを見ても明白である。

協同的精神はダルトン・プランの思想を一貫して居るものだ。

多くの實驗者の結果を綜合して見るに、凡そ左記の箇條は、實驗室にある兒童が必ず守らざる可からざるものとせられる。

一、實驗室の出入は敏活靜肅なるべきこと。

二、他人の學習を妨ぐるが如き行爲の絶對にあるまじきこと。

三、實驗室に空席なき時、參考書等が全部使用せられ居る時等は、學習の豫定を變更すべきこと。これは所謂兒童の自由を束縛するに似たれ共、社會的生活の點より見れば決して左にあらず。

四、他の生徒が教師のもとに至りて指示を乞ひ、相談を爲しつゝある時には決して

自分の席を立たざること。

五、教師の助言を求むることは、なるべく自由學習時間に於てなすべきこと。

六、教師には親しむこと。進んで指導を受くること。

七、校具類及圖書類は叮重に使用し、その後始末に注意すること。

八、圖書の借出及返却は必ず規定に從ふこと。

九、實驗室の秩序維持に助力すること。

十、學習時には冷靜なる意志を以つて、獨力大いに努むること。

要するに、兒童の自由活動を尊重する教育は、教師の任務をして益々重からしむるものである。右の一例に見ても、教師は決してサボル事の出來ない事を知るであらう。

四、實驗室の概觀

朝登校したる兒童は自分の好める實驗室へ勝手に入つて學習に進めば良い。地理を

やらうとするものは地理學習室へ入る。數學のものは數學の學習室へ、それ〴〵入つて、自分のやらうと思ふ事を一生懸命にやる。

從來の教室は座席が一定されて居た。けれ共ダルトン・プランの坐席は、何處へ行かうと自由である。前項に一寸述べた樣に、机の如きも大小種々のものがあり、全く自分にて、獨學自習をしやうと思へば一人用の机に向ふ。小團にて研究するの便宜なる時、又は必要なる時は數人用の大卓子へ行けば良い。單獨學習の結果を持ち寄りて相互に意見を交換し、或は協同して調査研究をなす。故に、この小團は自然の中に出來て來るものである。即ち互にその力の合ふ兒童等は何時の間にか一緒になるものだ。さうしては良く協同的精神を以つて學習をして行くものである。

けれ共、斯樣なる協同的學習に就いては、指導者たるものが、又特別の注意を要する。この事に關しては、曾つてアダムス教授も論評したる事であるが、例へば國語の協同的學習をする時に、一人は辭書を引く役を務める、他の者は解釋する役を引受ける

ると言ふ樣なことにすると、それは勿論時間の經濟にはなる。然しながら何時までも之を繰返して居ては、辭書を引く者は解釋が不得手になり、解釋するものは辭書を引くことが下手になる。

斯樣に兒童があまり早く專門的になり、一方面に偏することは、圓滿なる人間を作ると言ふ上からしても非常に忌むべき事でもあり、危險でもあるから、協同的學習は毎週仕事の分擔を交換する事の必要が生ずる。然らざれば實生活に處しても偏したる人間となり、融通の利かざる者となる。この點には細心の注意を拂つて、協同的、社會的の學習が行はれる樣にすることは、ダルトン・プランの効果を十分に擧げ得る所以である。

一人用の机にありて全く獨學自修せる時にあつても、勿論この協同的學習の觀念はなければならぬ。

右の樣にして、實驗室にて學習せる時、教師もそれ〴〵の仕事をなす。兒童は實驗

室に在る時の作法を良く守りて學習して行くのである。

我國に於ける教室を實驗室にしやうとする時は、机の如きものは矢張りその儘使用することが出來るであらう。個人用のものはそのまゝとし、小團學習用には數箇のものを、配列に工夫して置けば良いわけである。

その他實驗室内の各種研究資料の置き方、或は机の配列、教師の位置等は、時處に應じて、教師の手心に依り臨機に定むべきである。強いて或る規定に從はねばならぬ理由はない。

實驗室の入口には何實驗室なるかを明示せる札を掲げ置くべきである。それと共に時間割をも掛けてあるが普通だ。尤も、時間割と言つてもそれは唯自由時間と、學級教授の時間とを明瞭に區別せるものであつて、擔任の教師が擔任學科の實驗室に入る時間を明示したもので從來のものとは全然異る。

この實驗室の中にありて、各兒童は全然豫定案に依りて學習して行くのである。何

時に室へ入らうと、或は何時間學習しやうと、それは欲するがまゝである。

豫定案に關しては次章に於て述べるつもりである。又、その實例は後篇を參照せられたい。

學習を終りて實驗室を出でんとする時は、それを必ず教師に告げなければならぬ。而してこの際各兒童の所持せる學習進度表とも言ふべきグラフへ、學習の進度を記入しなければならない。

學習進度表には、教師用のものと兒童用のものとの二種類がある。その實物の見本として次に掲出してあるものは、バークハースト女史の經營せるニュー・ヨーク市兒童大學校にて使用せるものである。之れが最も模範的のものと思はれるから、特にこゝへ掲げて置くのである。

生徒各自の、自由學習の程度を知つて居ることは、教師にとりても、又兒童にとりても非常に重要なる事である。人間の通性として、自己の爲す事が幾何程度の進歩を

示して居るかを明知して居ることは、更らにより多くなさんとするの意志を刺戟することが非常に多いものである。若し自己の學習作業が進歩遲々として、自己の豫想通りに行かないとか、或は他人に比較して遲れて居るとかの事を知るに於ては、更らに大いに發憤の動機を與へらるゝものである。若し又、意外に進歩を示したる自己の學業の跡を見ては、學業の愉快なる事を眞に悟り得、益々勵まんとの意志を奮ひ起すに至るものである。

教師にとりても、斯樣に兒童の學習進度を知ることは、平常、生徒を指導する上にも、又は次の學習豫定案を立てる上にも大切なる資料ともなり、平常、教育上に關する反省、研究の參考になることも多い。

五、各種進度表の記入法

甲號表（生徒用進度表）(The Pupils Contract Graph)

一、次頁の圖が卽ちそれで、一ヶ月の仕事が完成せるを示せるものである。

二、一學科の學習を終へて實驗室を出でんとする時に記入する。

三、一ヶ月間、卽ち四週間分の進度表で、生徒は常に之れを所持して居る。故に紙質はなる可く丈夫なるものを選ぶこと。

四、一ヶ月の豫定案は、毎週五日宛、卽ち全部二十日で終了するわけである。1、2、3等の文字は、學習せる日をあらはしたものである。で、この表に就きて說明すれば、學習者Aは、第一日目には數學を一日分（卽一單位以下これに準ず）と、國語を五日分學習し、第二日目は國語を五日分、第三日目には歷史を五日分と言ふわけである。以下これに準ず、若し中に欠けたる日數あらば、それは全然學習せざりしこと。卽ち缺席したる事を意味する。例へば12なる數が表中になき時は、十二日目は缺席せることを示すものである。

五、若し二十日以內に契約仕事の全部を終了したる時は、その餘裕の時間を以つて、

甲第表（兒童用進度表完成ヒ）

姓名	A	學校名	大學學校	初めた日	十月五日	4
住所		年齢	12	終りし日	十一月一日	數の週
		學級	2	慶定案の番號	1.	數の日
						席缺

	數學	歷史	地理	國語	理科	佛語
第一週	21	12	11	21	17	9
	20			19		
					16	
第二週						
	19					
第三週						
			10	2		7
		8			14	
	8					
	7					
第四週	5	3	6	1	13	4
	4					
					5	
	1					
學科成績	A.	A.	B.	A.	A.	B.

101

自分の欲する學科に就き、更らに深く或は廣く學習して行くのである。

六、この表は教師及生徒の參考となるばかりでなく、生徒の父兄も之れに依り、兒童の指導上種々と得る所も多い。

七、自由學習の學科目は、この表にもある通り、大抵一度に六科目である。

八、實物の大さは九インチに五・五インチと言ふ事になつて居る。

九、最下の學科名の下にあるA、B、C等は成績評點（一ヶ月を通じての）

乙號表（教師用進度表）（Instructor's Laboratory Graph）

一、生徒用進度表に記入すると同時に、卽ち實驗室を出る時にする。記入の方法もそれと殆んど同じい。

二、各學科別にて、一枚の表に全生徒の進度が瞭然と記入されてあるから、教師は種種なることにこれを利用することが出來る。例へば個人指導や、小團指導、その他指導上には是非共なくてはならぬものなのである。

三、この表は各學科實驗室の一隅へ掛けてあり、兒童は何時にても見得る樣になつて居る。故にそれに依りて、他生の進度をも知悉することを得、小團研究をなす時の力の合ふ相手を見出す等のために、非常に便利なものである。

四、例示せる圖は第五日目の地理科の進度を示したものである。五日目に早や既に十五日分まで學習せるもあり、或は四日分位しか出來て居ないのもある。

五、この表の大きさは十二インチに八インチを普通とする。

丙號表（所要時間表）（Form or House Graph）

一、全學科に就き、各生徒が一ケ月間の豫定案を完成するに、何程の時間を要したるかを、一目して知るために一週毎に記入する表なのである。

二、教師はこの表に依つて、全生徒の作業進歩の程度を知る事を得、將來豫定案を立つる上の參考に資し、その他指導上に多く利用する事が出來る。殊に個人指導の上には缺く可からざるものである。

乙號表

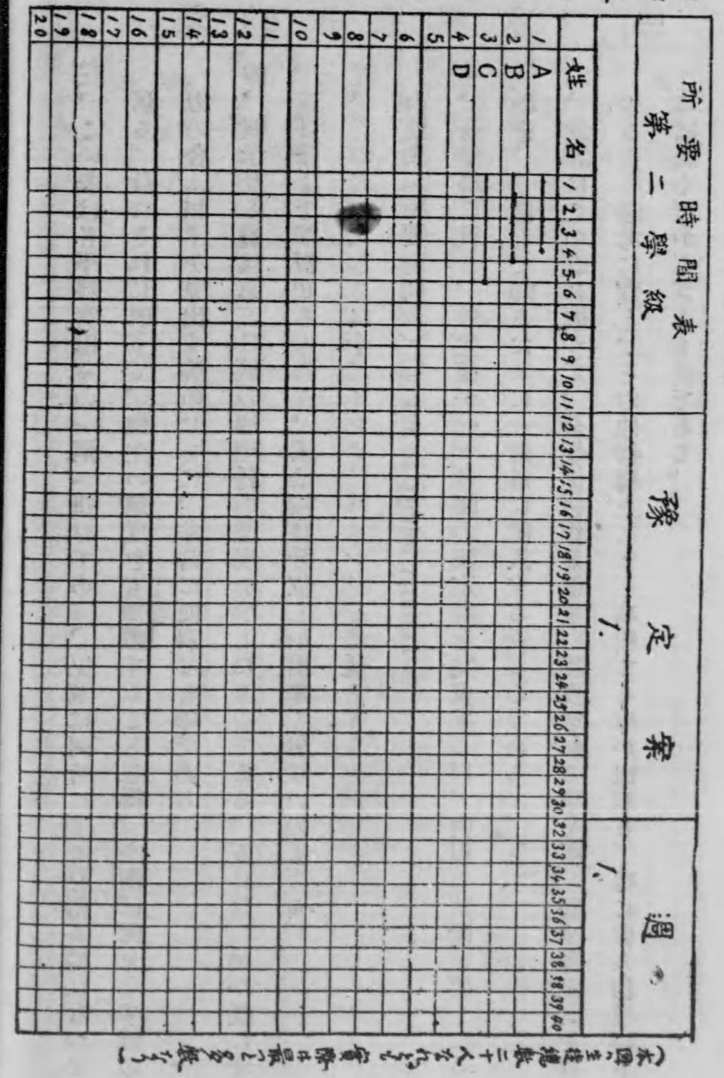
教師用進度表

學科 地理	學級 4.	豫定案の番号 1.	教師 X

氏名		第一週					第二週					第三週					第四週				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1	A																				
2	B																				
3	C																				
4	D																				
5	E																				
6	F																				
7	G																				
8	H																				
9	I																				
10																					
11																					
12																					
13																					
14																					
15																					
16																					
17																					
18																					
19																					
20																					
21																					
22																					
23																					
24																					
25																					
26																					
27																					
28																					
29																					
30																					
31																					
32																					
33																					
34																					
35																					

丙號表

所要時間表（



）

三、圖は便宜のため、十科目の進歩を記錄する樣にしてある。圖の一行間は五單位の仕事量を表はす。一科目につき一週五單位の仕事になつて居るから、一ヶ月にて二十單位、十科目では二百單位が仕事の總量である。六科目ならば總量は百二十單位となる。

四、記入法は、例へばAなる兒童が一週に歷史四單位、國語三單位、地理五單位、理科六單位、佛語一單位やりたりとすれば總量は十九單位となる。それを五にて割れば、A兒童の一週の仕事量は三と五分の四となるから圖の如く記入する。

五、大きさは十二インチに十インチ半。

右述べたる三種の表が、最も普通に使用せられて居るものではあるが、學校によりては、その他に未だ種々なるグラフを用ひて居るものがある。又進度も、必ずしも右の形式に準らなければならぬ事はない。生徒の年齢やその他の事情に依り適宜に考案すべきものである。或はこれよりは簡單にして便利なる方法もあらうと思はれる。要は

教師が自からの經驗に依る獨自の工夫が肝要である。他に必要あらば、種々なるグラフを使用せしむる事も良からうし、それに依りて非常なる利益を受くる事も多からう。

由來、かゝる表を使用する事の、案外に便益多きことは、少しく經驗を有する教育實際家の常に口にする所である。ダルトン・プランの發展に伴つて、尙諸種のグラフも考案せらるゝ事であらうと思はれるが、各人がそれ〴〵に工夫を積まれん事が、最も望ましき事なのである。

六、本章のむすび

ダルトン・プラン實驗室の準備に苦心しなければならぬことは言ふまでもない。

けれ共、充分なる設備のもとでないと、ダルトン・プランの實施が出來ないと思ふのは、それは非常なる謬りである。英國等に於ける實施の狀況に觀ても、一二の學校を除く他、すべての點に於て理想通りの條件に叶ふものとてはありはしない。私はこ

こに繰り返して言ふ。Adopt and adapt as you think best. と。

實驗室も、理想的に言へば、十分に兒童を收容し得るだけの（滿員にて希望の室へ入る事が出來ざる事のなき樣に）廣さを具へ、研究資料は豐富に備はり、一學科毎に必ず一つの實驗室がある樣にしなければならない。けれ共、それでなくてさへ、十分に實施する事は出來るのである。

英國などには、一室を二科目以上の實驗室に宛てゝある所も隨分多いのである。例へば國語の實驗室と歷史等と一緒にしたり、その他之れと同樣な事は大分行はれて居る。けれ共その成績は決して惡くはないと言ふことである。

一般に、ダルトン・プランを採用せんと決定した學校でも、最初から學校全體をダルトン化すると言ふことはやらない。先づその一部分に試みて後に、全部に及ぼすと言ふ方法をとつて居るのである。之れが新らしき試みをやる上に於ては、最も安全の策なることは言ふまでもない。斯樣なる時には、一室を二つも三つもの學科實驗室に

も流用しなければならぬわけになるのである。

私の考へに依れば、極端な場合には、一室を全學科の實驗室にしても宜からうと思ふのである。こんな例は英國などにあるか、私は未だ聞いた事はないけれ共、それでも決してダルトン・プランを實施する事の出來ないわけはなからうと確信して居る。

我國に於て實施する事を考へて見る。中等學校にてはそれに大して困難はなからうが、小學校にては可なり多くの障碍があることを豫期しなければならぬ。英米に於ても主として初めには中等學校に試みられ、近時に至つて次第に小學校の方へもとり入れられることになつたものであるが、矢張り小學校の方には困難が多い樣である。尙この點に關しては後章に於て論述する考へである。

我國の小學校では、差當り高等科に於て實施するが適當ではなからうかと思ふ。尋常科でも、最初は五六年位の所が良からうと信ずるのであるが、何れにしても、かやうに一部分に實施するに就いては、實驗室は一學科一室と言ふわけには行かないので

ある。

一の實驗室を全學科に宛てて、その中にありて一教師が各兒童の相手をすると言ふことは可なりの勞力である。恐らく、單級の教授よりも數倍の心勞であらう。けれ共これも慣れて來れば初めの中の樣な事も無からうと思ふ。

然し一實驗室全學科と言ふことは、一學校の中の一學級だけしかダルトン・プランを實施しない時に、止むを得ずとる方策である。三學級あれば三つの實驗室が出來るのであるから、主要科目は二學科一實驗室と言ふ、英國などでは一般に行はれて居る方法にて實施する事が出來る。

尙、こゝに專科教員の事に就きて述べて置かう。

ダルトン・プランは元來學科擔任制をもととして出來た案である。故に各實驗室の主任教員は、それ〴〵の學科に關して、特別の研究と技能とを持つて居るものである。けれ共、これも必ずしも、專門の教師がなければダルトン・プランを實施する事が出

來ないと言ふわけのものではない。

英國に於ける實例に見ても、或學校にてはそれ〴〵專科教員のもとに指導を受けつゝあるが他の學校では必ずしもさうではない。普通の教員がダルトン式に働らいて居るのである。

我國の小學校に實施しても、矢張り全然ダルトン・プランの方式に則る事は出來なからうと思ふ。

要するに、英米に行はれて居る事の如何に拘泥せず、この案の主張する所に基き、最も自由に、大膽に研究して行くことが、最も賢明なる方法なのである。

第八章　作業の豫定案

一、豫定案の意義と價値

ダルトン・プラン實施上の、眞の中心問題たる豫定案（Assignment）に關して述べなければならぬ事になつた。

抑も豫定案とは何ぞ。前數章に說き來りし所にて、最早や略々明らかになりし事と思はるゝけれ共、尙こゝに於てその意義を確め置くの必要を感ずる。

豫定案は卽ち敎師と兒童との契約（Contract）である。一ヶ月間には是れ丈けの作業を完了すべしと言ふ事を約束したるものである。兒童は之れに依りて、自己の責任を自覺し、その作業、卽ち學習を完全に果たさんとするのである。

ダルトン・プランでは、兒童の學習をすべて契約仕事（Contract-job）であると見る。その契約仕事を明らかに記載したるものが、兒童の學習の中心となるべき、豫定案となるのである。

かゝるが故に、ダルトン・プランに依る敎育方法はすべてこの豫定案を中心として營まれて居るのである。兒童は全くこれに依りて學習を進め、敎師は善良なる豫定案

を作らんがために、日夜心を勞しなければならぬ。而してこの豫定案の良否や適否は直ちに兒童の學習能率の上に大いなる影響を及ぼし、又、敎師の敎育方法の巧拙如何も、豫定案を見れば直ちに判定することが出來るのである。

抑もこの豫定案は如何なる根據に依りて考案せられたるものであるか。私の考へに依れば、それは、最近非常なる進歩を示したる心理學、殊に兒童心理學にその基礎を置いたものであると斷言する事が出來るのである。

輓近心理學の指示する所に從へば、眞の精神的活動は、或る事象に對する觀念及概念を得たる後に、個々の具象的の事物に對して意義ある活動が出來ると言ふのである。尙、これを敎育上の事に應用して論ずれば、生徒の學習作業の如きは、先づ作業そのものに對する理解——作業に對する觀念——ありて後に、眞に意義ある學習をなし得ると言ふ事になるのである。

然るに從來の時間割に依る敎育方法は、この眞理に逆行して居た。從つてその方法

に依れば、生徒は或る一定の學習を完了したる後に初めて全體に對する觀念が得られ、理解が出來ると言ふ有樣であつた。從來の敎育が徹底しなかつたと言ふのも斯かる事由に基く事の多かつたのは否むべからざる事實である。

輓近心理學の最一つの發見は、興味なき所に努力は生じないと言ふ眞理である。この事に就きては、既に第六章で述べたからこゝでは略して置く。從來の時間割制がこの事實をも無視して、或る形成されたるものを、そのまゝ兒童に與へんとしたのは、確かに大なる誤謬である。兒童自らが進んで獲得せんとする所に、眞の興味があり努力が伴ふことは明白なる事實である。

ダルトン・プランにて使用する一箇月間の豫定案は、豫定案其ものが既に一の作業の概念であり、それが兒童の努力を誘致すべき形式となつて居るものである。兒童は豫め、自己のなすべき事に關しては知悉せるを以つて、自己の心理的要求に從つて、すべての作業を完了して行く事が出來る。豫定案は、兒童に對して、兒童の知らんと

欲する事、熱心に學ばんと欲する事を悉く指示して居るのである。

右述べたるが如くに、兒童の心理的要求を基礎として案出せられたる豫定案が、自由學習、自己創造の見地よりして、新らしき價値を包含して居ることは明らかである。唯、然し乍ら、十分にその價値を發揮せしむるためには、教師は適良なる豫定案を作製することを苦心し、兒童をしてその利用を誤らしめざる樣に、不斷の指導と注意とを要する。

二、豫定案の作製

豫定案の作製はそれ〴〵の專門教師が最も苦心する所であり、且つ困難なる事業である。英米に於ける實驗者は、何れも口を揃へてその勞力を要することの多きを言ひ、あまりに煩はしさに中止せんかとも思つた程であると報じて居る者もある。

ダルトン・プランに於て豫定案の作製は最重要なる事ではあるが、又それと共に、

確かに最困難なる事でもある。ダルトン・プランの實施を試みんとする者、この點に一つの苦心をしなければならない。左にその作製の順序方法等を一通り説明して、實際家の參考に資しやう。

豫定案作製の根據となるものは、別に學校に於て作製したる學科課程表である。卽ち從來の方法のもとに於て、教授案を作るのに、教授要目或は細目が必要である樣に、ダルトン・プランの豫定案を作るにも、そのもととなるべき學科課程の要目はなければならぬ。然るに、ダルトン・プランは決して學科課程の變更等を要求するものではないから、從來の教授細目はそのまゝ使用する事が出來るものと信ずる。それに依つて材料を適宜に豫定案の上に配列して行けば良いと思ふ。

後篇に示すが如く、豫定案は四週間を單位としたものである。初等の學級等に於ては往々にして、週を單位とせるものが、ないでもないけれ共、四週間を普通とする。而してそれを第一週目より第四週目にまで割り宛て、その中には學習上の注意事項や

問題や諸種の事項が記載されてあるのである。この豫定案の仕事を一箇月間に、どの程度にまでやる事が出來るかは、別の進度表に明瞭に記入せらるべきものなのだ。或者は豫定の分量を完了する事が出來ない事もあらう。或は時日の餘裕を作つて居るものもあらう。けれ共それは能力に差異あるものとしては致し方もない事である。

豫定案はそれ〴〵專門の教師の手に依りて作られる。地理科擔任の者は地理の豫定案を、歴史科のものは歴史の豫定案と言ふ樣にするのである。

或る地方では教員の團體を作り、その團體にて適當なるものを作製すると言ふ事も行はれる。日本ではこの方法が適當ではないかとも思はれる。我國には各縣に又は各郡に、更らに郡に數箇の教員會が形造られて居る。それ故、その一團にて互に仕事を分擔して豫定案を作れば比較的煩はしくなくて良いものが出來るであらうと思ふ。その地方だけであるならば、大體に於て兒童の氣質も環境も同じ樣なものであらうと思ふから、不都合な豫定案も出來はしないだらうと考へる。從來教授細目などは良く斯

うした團體の手に依つて作られたものである。

若し斯樣な團體がないとすれば、近隣の小學校が數校聯合して、それをやつて行く樣にしても良からう。必ずしも自分の校のみで作らなければならぬと言ふ理由はない。若しも斯くして共同に作製したものが不適當なものであつたならば、少しばかりの修正を加へれば何等不都合のないものとならう。

數校聯合して豫定案を作製する場合には、どう言ふ方法を執るが良いかに就きて私の私見を述べて見やう。

我國では勿論小學校では學科擔任にはなつて居ないけれ共、各校にはそれ〴〵或各學科に關して特殊の研究を積みたるものが居るものである。各校から各學科別に少くとも一人宛出る事にして、地理科ならその科の者のみが數人集り、互に意見を發表交換して豫定案の草案を製する事にする。この際には、更らにその分擔を決めて置けば便利であらうと思ふ。例へば、地理科であるとそれを學年別とか言ふ樣にして、Aは

五學年、Bは六學年、Cは高一、Dは高二と言ふ風にそれ〴〵分掌する、而して出來上りたる豫定案は、會合の場合にはみな持寄りて、自己の研究を發表し、その批評や意見を求め、互に訂正增補し、愈々實際に使用すべきものを完成するのである。

かくして出來上りたるものは、そのまゝにても使用が出來るものであるが、各學科相互の聯絡統合と言ふ事は、ダルトン・プランでは重視して居る事であるから、それがために、出來上つた案は更らに他の學科擔任者の手許に廻送して、出來るだけの精査を受ける。若しこの豫定案を見て注意すべき點があつたならばそれを記入して、もとの製作者の手許に返付するのである。

愈々完成したものは印刷して各生徒に配付し、こゝに兒童の學習作業は初まるわけである。生徒はその豫定案の指示に從ひ、欲する時間に欲する學習作業をなせば良い。

然るにこゝに一つ問題となることは、如何に年齡も同じく、豫備的教育の程度も同

じく、一般の知能にも大差のなき兒童とは言へ、研究の進度にはそれ〴〵遲速あることは免れないから、それに對して唯一種類の豫定案では、種々なる點に於て不都合を見るのではないかと言ふ事である。

私の考へる所でも、それは確かに首肯しなければならぬ事だと思ふ。唯一種類の豫定案では、如何に時間と方法の自由を許したからとて、矢張り兒童に多少の無理の行く事は免れない。で、理想的に言へば、斯かる豫定案は、兒童の一人々々にそれ〴〵個性に適應したるものを作製して宛てがふが最上であるけれ共、そんな事は言ふべくして到底行ふ事の出來ないものである。この點に關してはパークハースト女史も種々と考究されて居るのであるが、矢張り根本的の解決は出來て居らぬ樣である。

實際の方策としては、大體豫定案を優、中、劣の三種類に大別して、優等兒には難かしい優の豫定案を、劣等兒には容易い劣のものを、中等兒には中をそれ〴〵使用せしめて居る學校は英米には大分ある。三種類位に別けるのは大して煩はしき事もな

く、比較的効果の多い方法であらうと信ずるから、實施上では、先づこの折衷案にて我慢するより他はなからうと思ふ。

因に、非常に能力の劣等なる者に對してはダルトン・プランも今の所格別に救濟の方法がないと言ふ事である。或人は、ダルトン・プランを非難して優秀兒のみに効果の多い方案であると言つたが、私は必ずしもさうとは信じないけれ共、いくらかかゝる傾向のない事もない。

豫定案を作製するに就きては、尙他にも種々の方法もあらうと思ふ。矢張り之れも實地經驗の上より割り出さるべきものである。

又、兒童自らの意見を聞く事も非常に重要なる事である。ダルトン・プランは、案そのものゝすべてを兒童との共働に依つて成立せしめ、構成せしめ、發展せしめたものである。

バークハースト女史自らも曾つて言ひたる言を私は思ひ出さずには居られない。

『私は關係者諸氏に自分の案を相談する前に先づ兒童に計つた。……兒童の暗示はこの案を發展せしむる上に非常に力があつた……私の教育せんとする兒童の自由は、自から正しき道を發見して呉れた……。』

豫定案に關する良否や適否は教師よりも學習者たる兒童自身がはるかに詳しく知つて居る筈である。教師は常に兒童の言葉に聞き、その暗示に從はなければならぬ。然る上にてダルトン・プランは益々その價値を發揮し、豫定案の作製に就きても意外な利益を受くる事であらう。

二、豫定案の備ふべき條件

豫定案は單に兒童の一箇月間の仕事を指示するものであるのではない。仕事の分量と參考書の頁數を指示する丈けのものであるならば、何も大してその作製に苦心は要しない。豫定案の根本目的は凡そ二つある。卽ち、兒童に研究法を暗示すること、研

究の目標を立てることゝである。それがために、最良の豫定案と言はれるものは如何なる條件を具ふ可きものであるか。豫定案を見れば兒童の心中には自ら大なる興味が湧き來り『どうしてもやらなければならぬ。』と言ふ學習の動機を喚起せしむるの力を有するものが、豫定案に對して第一に要求せらるゝのである。かゝる價値あるものを作らんがためには、

一、記載せる事項はよく要點を掴んだものであり、明瞭にしてすべては兒童本位に書かれてあること。一讀すれば直ちにその意味を解し得るが如きものなること。

二、兒童の知能に應じて、あまり困難なものでもなく、又は容易すぎるものでもなくて、兒童の自發活動をそゝり立てる樣なもの。

三、一ヶ月の作業全體の概觀を得る事が、作業の上に非常なる價値があり、かゝる根據のもとに考案されたものであるから、豫定案には必ず一ヶ月先きまでの作業の要目を全部記載し、且つ、研究上の注意事項、一定の問題表を添ふること。

四、なるべく兒童の各個性に適應せしむるために、三種類位の異りたるものを作ること。（分量の多少に差異をつければ良い）

右の他に、豫定案に記入すべき事項は次の通りである。

一、完了すべき作業の範圍を明示すること。

二、各作業の目的を明らかにせられたること。並にその題目、卽ち研究主題の名稱。

三、問題の解決、卽ち作業の完了に必要なる暗示の與へらるゝこと。

四、研究中、特に記憶すべき事項。

五、某題目の研究に就きて特に協議すべき必要ある時はその日時を記載すること。

六、研究に要する教科書參考書の類を指示すること。

七、各作業の完了に要する適當の時間を示すこと。この時間は教師が大體必要と信じた時間數である。

八、他教科との聯絡統合に關して注意すべき點、或は興味ある點を指示すること。

九、學習を完了したるか否かを證明するために必要なる問題を添付せること。

十、その研究に關係ある事項を掲示板に書出せるものについて注意すべきこと。

大體右の樣な事項が豫定案に記入せらるゝのである。勿論、これ等の全部が、何れもの豫定案に必ず記載されなければならぬと言ふことはない。必要なき時は省略せられて毫も差支へはないのである。

後篇に記したる豫定案の實例と對照して良く研究せられんことを希望して置く。

第九章　協働の保障

一、作業の契約

ダルトン・プランは協働をその根本原理の一として居ることは既に述べた。殊に教師と生徒との相互共働は最も重要なものであつて、ダルトン・プランに依るすべての教育的活動は、何れもこの教師と生徒との Co-operation を中心としてなされて居るものである。これが失はれたならば、ダルトン・プランは學校に於て實施することが出來ないといふ程のものだ。

實施の初めに當つては、この新方法が如何なる組織のもとに如何なる方策に依りて行はるゝかを、十分に生徒に理解せしめ置くべき必要がある。然らざれば、生徒は自己の作業に關して、全き責任感を自覺すること能はず、從つてダルトン・プランの効果を充分に擧げることが出來ない。

學習は作業であつて、それは教師と生徒との契約仕事である。この意味は前章に於て既に述べた。この契約を實行すべく、生徒には十分なる責任感を持たせなければならない。これがためには勿論種々の方法に依りて、その契約を實行すべき保障とするのであるが、左に一例を示して、如何なる方法に依りてなされるかを説明しやう。

これはダルトン協會（Dalton Association）より最近發表せられたるパンフレットに記載せられてあるもので、學習上の共働を保障するために、ダルトン・プランに關してその要領を記載したるものを生徒や父兄等に配布して、その理解を求めんがためのものである。因に、ダルトン協會とは、英國に於て最近成立したる團體であつて、ダルトン・プランの原理や實際を研究し、教育上に資せんとするを目的とせるものである。

二、新舊の教育方法

吾々は今やこゝに從來の教育方法よりはるかに進歩したる、新らしき方法を實施せんとしつゝある。これは從來のものと比較して、多くの利益が含まれて居ると信ぜらるゝものであるが、吾々はこれが果して謂はるゝ如き利益があるや否やを論議する前に、こゝに實際に試みる必要を感ずるではなからうか。これを實施したる後の感想や

意見は各自よりどうか腹藏なく申出でられんことを希望する。學校としても、その試みに對する意見は細大洩らさず發表するの考へである。然る後に於て、吾々の執るべき道は眞に如何なるものなるかが判明するのであらう。

諸子も既に知れるが如くに、從來の教育には種々なる缺陷があつた。例へば同一人の生徒にして各學科を學習せんとするに當り、或科目に對しては易々として學習を終り、或學科に對しては比較的に困難を感ずる。又、同一の學科に對しても、或生徒は非常に迅速にその學習を進めて居るものがあり、他の者は未だその半ばにも達して居らないものがある。言ふまでもなくかやうなる不公平は速かに除かれねばならぬ。吾々は今やそれをどうして除くかを考へるのである。けれ共、今までの如き學級組織のもとにあつては、何としてもそれは除かれぬものであつた。從つて或生徒は無益に時間を費すことも多かつた。吾々は今は、各生徒が最善にその時間を利用する方法を考へる。然かすれば今までよりも數倍の學業の進歩を見ることは易々たる事である。

これより實施せんとする新らしき方法に依る時は、時間を徒費することや、不足することは絶對になく、各生徒は從來の教育に見たる、稍々もすれば不公平なる取扱を受けると言ふが如きこともない。何となれば、各生徒は自分の欲する所の學科目を、欲するがまゝの時間内に、自由に研究することが出來るからである。

例へばこゝに一人の生徒があるとして、フランス語の學習よりも數學の學習に困難を覺ゆるならば、その生徒は多くの時間を數學の學習に割宛てることが出來る。然し乍らこの際最も注意しなければならぬことは、それがために容易なる學科を忽せにしてはならぬといふ事だ。各學科共に、一定の標準線にまでは必ず達せしめて置かねばならぬ。

三、新方法の實施

さてこの新らしき方法は如何にして行はるゝかを說明しやう。

先づ最初に各生徒は教師よりその作業の分量を記載したる豫定案を交付せらるゝ。之れは諸種の教育上の考慮をめぐらした後に、生徒に最適と信ぜらるゝ樣に作製されたものであるが、次第には生徒と協同にて作製する樣にもなるのである。豫定案を交付せらるゝ時、各生徒は教師より豫定案に關しての說明を聞く。この時、豫定の作業を終了するに就きての最善の方法が說明せらるる。如何なる教科書を使用するが良いか、或は他の參考書としては何を選べば良いかといふ事が話された後、豫定案が交付せられるのである。豫定案には教師より注意せられた事項は簡單に記載されてあるが、教師よりの說明を聞けば一層明らかに了解出來るのである。同じく豫定案には若干の問題が含まれて居る。之れは豫定の作業を終つたか否かを證明すべきためのもので、之れに對して滿足に答案を與へさへすれば、作業は完了したものと認められる。

豫定案（Assignment）は卽ち作業の契約（Contract of work）であつて、普通の個人間の契約と同じものだと思はなければならぬ。從つて生徒も契約の當事者であるか

ら、その作業に對しては徹頭徹尾責任を負はなければならぬわけである。

次に教室も從來の學級制度のもとに於けるとは全然異る。それ〴〵の學科目に從つて、特別の實驗室が設備せられて居る。其處には各生徒が作業を完成するために必要なる、あらゆる設備が出來て居る。生徒の要求する教科書も參考書もあり、その他地圖、繪畫、表圖類等なるべく多數のものが取揃へられる。而してこの實驗室には特別の教師が始終附添ふて居て、若し生徒自らの力にて不可能の事がある場合には、その助力を求める事が出來るけどれも、生徒は最後まで自己の努力を續けんことを要求せられる。それが各自の生徒の作業を最も價値あらしむる所以であるからだ。

各教室は最早や教室(Class)とは呼ばれないことになつた。それは實驗室(Laboratory)と改められなければならぬ。從つてすべての教室は今後は、地理實驗室、フランス語實驗室などと稱せられる。

學習時間は午前九時十分より、午後四時に至る。午前中はすべて自由時間であるから、各生徒は全然自由にその欲する實驗室に入ることが出來る。午後は大部分、從來の如き學級教授を行つたり、その他種々の討論をやる事もある。

四、實驗室内の學習

今假りに、Aなる生徒が地理を學習せんとする時は、その生徒は自由に地理實驗室へ入れば良い。其處に於ける作業は、豫定案の指示する所に從ひ豫め教師より說明せられたる通りに、直ちにその作業を始むれば良い。其處には必要なる書籍類、參考資料等は備はつて居るから欲するが儘に使用する。然しながら、この際同じ實驗室にありて作業にいそしめる、他の多くの者の邪魔になる樣な事は絕對にしてはいけない。

學習中、自分の力にては解決することが出來ないと言ふ困難なる問題に遭遇した場合でも最後までは自ら試みて、それでも尙その目的を達する事が出來ないと言ふ時に、初めて教師に相談をする。然しながら、斯樣な問題に對しては單に相談し、解決した

だけでは、決して滿足してはならない。解決の後でも、幾度となく試みて、その難問を最も確實に了解し、把束しなければならぬ。

地理學習を完うしたる時は、生徒はこれを必ず教師に告げなければならぬ。この報告を受けた教師は必ずそれを精細に點檢して、生徒の作業進歩の狀況を、一目瞭然たらしむるために作製した、各生徒の作業進度表（Work Graph）に、如何に記入すべきかを指示する。

地理學習を終つた生徒は、隨意に次の作業、例へば國語の實驗室に入ること全く自由である。この際に於ても初め地理實驗室に入りたると同樣の注意を以つてのぞむ。

若し生徒が、欲する所の實驗室に一の空席も見出し得ないと言ふ場合に遭遇せば、止むを得ないからその生徒は自分の作業を延期しなければならぬ。而して他の實驗室に入るのである。

一週の中、或一定の時間は、教師と生徒とは全く一學級の教師生徒として集ること

がある。これは各自の作業につき討論をなし、困難なりし點を語り合ひ、より以上に各自の學業をして進歩向上せしめんがためである。この他、教師よりの講義や說話があつたりすることもある。

豫定案の作業は平均して學習して行かなければならぬ。たとへ一科目にても完了せざるものあらば、他の學科が如何に早く終了しても、決して學習を進めて行くことは出來ないものである。豫定案が、或學科目に偏して居ると言ふことは決してその生徒の賢を語る所以ではないのだ。

五、自由と責任

吾々はこの新らしき方法を採用する時、最早や決して舊來の家庭課業は必要でない。生徒が當然なさねばならぬ作業は、すべて豫定案に記載されてあり、その終了に要する時間は兒童の自由に委されてあるからだ。けれども、それでも豫定の作業を完成す

るために、學校のみにては十分に時間がないと言ふものがあらば、生徒は無論作業の一部を家庭のものとしても良い。但しこの場合は、必ず教師の認可を受けその旨豫定案へ記入して置かなければならぬ。

又若し、或生徒にして、その研究を一層廣く、或は深くせんがため、豫定案の作業以外に、參考書等を借用して、家庭に於て研究せんとするならば、それは無論、教師は喜んで、如何にして研究をなすべきかに就きて、親切なる助言を與へるのであるけれ共、この際に如何なることをなすべきかは全く兒童の自由選擇に依らなければならぬ。

ダルトン・プランに依る時は、右述べたる所にも明らかなる通り、生徒には全然自由が許されるのである。各その特殊性能の要求する所に合致したる自由がある。けれ共、この自由は生徒をして自ら大なる責任を生せしむると言ふことを忘れてはならぬ。從つて生徒各自は、この自由を最も善く利用せんと努むることが大切である。自由を

惡用することは、自分自身の時間と機會とを徒費するものであることを悟らねばならぬ。

自由を善用することを知らざる生徒、自ら自分の精神を荒廢せしめつゝある生徒は何時までたつても進歩向上なく、後より後よりと進み來るものゝために席をゆづらねばならない事になる。

六、ベルと學習

一の實驗室より他へ移らんとする時には、最も靜肅に、敏捷に動作しなければならぬ事は言ふまでもない。その他、何時如何なる所にても、生徒の頭には、他の多數の者の事を考へなければならぬ。他の多くの生徒達も、矢張り自分と同じく、それ〴〵の作業に熱中して居ると言ふ事を考へるならば、前述の言葉も自ら明らかになるのであらう。要するに、學校といふ大きな機械を最も圓滑に運轉せしめなければならぬの

である。

相圖のベルの鳴るのは午前九時十分、九時三十分、十時十五分、十一時、十一時四十五分、零時三十分、午後一時五十五分、二時、二時四十分、三時二十分、四時である。朝、ベルの鳴るのは單に時間を知らすためであつて、決して一の實驗室より、他の實驗室へ移れと言ふ相圖ではない。午後のものは、或一定の課業が終りたることを示す。九時十分より九時三十分までの間は、各生徒は自分の學級の教師と共に、自分の學級に集り、先づ祈禱をなし、それより教師と共に、或は他の生徒と共に、その日になさねばならぬ作業のことに就きて討論する。又、豫定の作業と時間との關係を、自ら十分に考察することが出來ないと言ふ場合には、この時間を利用して、教師にその旨一言告ぐれば、教師は親切なる助言を與へるのであらう。

大體右述べた如きこと卽ちダルトン・プランの要領を良く說明するのである。之れはダルトン・プラン實施上非常に重要なる事であつて、かくして良く生徒の理解を得

て置くと言ふことは、この案の實施をして成功せしむる所以である。尙、右は生徒の理解を得るための一例を示したに過ぎないから、他にも方法はあるのだらうと思ふ。

第十章　教科書及參考書に關する諸問題

一、教科書の價値

從來の教育方法に依れば、教師にとつては教科書は實に唯一無二の寶典であり、金科玉條であつた。教師は唯教科書にのみ絕對の價値を認めて、兒童はむしろ教科書の從と見られて居た。これ卽ち教科書中心教育なる名稱が起つた所以である。教師の手より薄つぺらな一冊の教科書を奪はんか、その教師は茫然自失して殆んどなす所を知らないであらう。斯かる狀態なりしが故に、教師は唯教科書を中心とし、媒介物とし

て活動するに過ぎざるものであつた。

然らば教科書は果たして斯くの如き價値を有して居るものであらうか。

教科書の無用が叫ばれた事もあつた。その改革の急務を論ぜられたこともあつた。私はそれがむしろ當然なりと信ずるものである。少くとも現今我國に行はれ居るが如き教科書であるならば、私は殆んどその價値を認めることは出來ないのである。何故に然かく論ずるのであるか。

一言すれば、現行の教科書は毫も自學自習に適して居ないからだ。全く概念のみを集めた樣なもので、徹頭徹尾、教師の講義説明を聞かざれば解する事が出來ない樣になつて居る。又、その内容に至つても頗る貧弱なるもので、或る問題に對する解決の資料とすることなどは迚も出來ない。

從來の如き他力主義の教育、教へらるゝ教育であれば、斯樣なる不完全極まる教科書を使用の出來ざることはなく、兒童は一から十まで教師に賴る他には仕方もない事

であつた。何時までも他力主義の教育が行はるゝならばいざ知らず、現今の如く、兒童自からの創造的活動を重んずる教育の重視さるゝ樣になつた時に於て、斯くの如き教科書が存在すると言ふことは一種の矛盾に違ひなかつた。

英米諸國に於ても、教科書に關しては矢張り斯くの如き問題が横つて居た。果然、ダルトン・プランの如き兒童中心主義、自發活動を尊重する教育方法のもとにありては、教科書の問題に困難を見なければならなかつた。

英米に於けるダルトン・プランの實施者は、何れも口を揃へて、現行の教科書の無價値なることを非難し、その改革の緊要なることを絶叫して居る。その實際の狀況に見ても、徹底的にダルトン・プランを實施せる學校に在りては、殆んど教科書は廢止して居るが如き狀態である。

要するに、教科書たるの價値は、兒童の學習研究の相談相手たり得るの點にある。この意味に於て、現行教科書を根本的に改革することは、たゞダルトン・プランの實

施者が要求するのみではない。兒童に卽したる教育の見地からも必ず論ぜられなければならぬ問題である。

二、ダルトン・プランと教科書の改革

上來論じ來りたるが如く、ダルトン・プランの見地よりすれば、教科書は當然改革せらるべき運命に置かれたものであると言はなければならぬ。

けれ共、これは實に重大なる問題である。改革などと言ふことは容易く論議が出來ても、愈々それを實行することゝなれば、其處には重大なる難關が横はつて居ることを悟らなければならぬ。教育の理想のみより論ずれば、或はその實行も可能であるが、單に理想的の見地よりする能はざるものである。

殊に、我國に於ては、諸外國に比較して、この教科書改革問題は一層の困難を伴ふものである。小學校用教科書が、國定制度であることや、中等教科書の如く檢定制度

のものであつても、現今の如く當局の方針に束縛されて居る樣では、どうしても思ひ切つた改革が斷行の出來ないのは當然である。

斯く論ずれば、問題は教育の根本に觸れて來なければならぬのであるが、要するに、一國に於ける教育の實際運營は、常に國家的及び教育的の二つの見地からなされなければならぬものであつて、教科書の如きも、國家的の規制を免れることは出來ない。

英米の如きは我國と比較すれば、この國家的勢力（又は規制）の教育に及んで居ることは、はるかに少い。故に教育的の見地よりして、自由なる改革を圖るの餘地がある。

ダルトン・プランの實施と教科書と言ふ問題を考へた時、私は、教育理想と國家理想の合致調和と言ふことを念頭に浮かべた。教科書問題もそれに依りて解決されなければならぬと考へる。尙この問題は次の章に於て論ずる。

昔、封建時代の寺小屋に於ては、教科書に四書五經の如きものを使用し、それを非

常に尊崇した。その時分には、それ等を學ぶことが教育と謂ふもの、全體であつた。儒者、學者が經典を尊ぶことは非常なものであつた。我國の現今教育にも、この寺小屋時代の教科書尊重の氣風が、矢張り遺り傳はつて居るのではないかとも、私は考へる。

前にも一言せる樣に、我國の教育者は確かに、諸外國に比して教科書を尊び過ぎる樣だ。これも教科書の改革を困難ならしむる一つの原因ではなからうかとも思はれる。

三、教科書改革の要件

前二章に於て私は教科書改革の必要を論じた。ダルトン・プランではそれが重要問題であるからである。然るに、眞にダルトン・プランを實施する事となれば、教科書なるものは殆んど無用である。作業の豫定案は時間割の代りではあるが、一部分は教

科書の代理をも勤めると思ふ。而して教科書と參考書の區別は出來なくなつて、何れも學習の研究資料としての價値あるものとなる。つまり、豫定案に明示せられたる作業を完成せんがためには最早や教科書參考書の區別は必要がなくなるのであらう。

ダルトン・プランに於ける教科書の改革を論ずるものは、この點を明らかにして置かなければならぬ。教科書の改革を論ずるよりも、ダルトン・プランの實施方策を先きに攻究すれば、教科書問題は案外に容易く解決されるかも判らぬ。

然るにダルトン・プランでは教科書に對して、如何なる要求を持つて居るものであらうか。この問題は、教科書は參考書と同性質のものだと言ふことよりして容易に解決が出來るであらうと思ふ。即ち、本章の第一項に於て既に説明を與へたる通り、兒童の學習研究の相談相手たるにあること、これが教科書改革の第一要件なのである。この要求を滿たすべき教科書は如何なる條件を備ふべきであるか。それは後に述べる參考書の要件と殆んど同一であるから、こゝには省略して置く。その項を參照せられ

たい。

元來、この教科書問題は英國に於ても、ダルトン・プランの實施上の一大難點として、多くの人々の頭を惱ました事がらである。ダルトン・プランの實施される事が多くなるに從つて、現行の教科書は根本的に書き直されなければならぬものとして、彼のアダムス教授の如きも、教科書の問題に關しては種々とその意見を述べて居る。

一體教科書は、學科本位と兒童本位との二つの見地から書かれたものがあつて、前者は論理的書き方、後者は心理的書き方とも稱すべく、論理的書き方は、或る學科を區分して、一定の段階の兒童に、一定の分量だけ教授しやうとして排列するのである。けれ共、兒童に依りては、一定の分量以上に學習し得る者もあるのであるから、この方法は兒童の心理を全然無視せるものであつて、兒童の學習資料たるべく作られたものでなく初めから教授しやうとして編まれる。

心理的書き方は、これに反し、兒童が自學的に學習し得るが如く作られる。ダルトン・プランには後者のものが適當なるは言ふまでもない。然るに從來の教科書は殆んど前者のもので、心理的書き方に依りたるものと雖も、ダルトン・プランに適用するには、どうしてもその見地からして、書き直されるのが急務である。

然らばそれにはどう言ふものが良いかと言ふに、內容は連續的に排列されて、三週間分とか一ヶ月分とかに大きな區切りを付けて置く必要がある。漸次に斯くの如きものも出來得ることゝ思はれる。

恐らくは、將來の教科書は、論理的と心理的とが調和されたものが、理想的であらうと、アダムス教授は言つた。

將來はどうしても、出來上つた教科書の如き體裁をとらぬ、兒童が自分で知りたいと思ふ研究資料をさがし出し得るものが必要であらうと信ずる。現行の教科書の如き兒童の心理を無視したるものは、速かに葬らねばならぬ。尙、この項を終るに當りて一言して置きたいことは、私が初めに、我國現行の教科書は殆んど價値がないと言つ

た事に就いてゞある。それは兒童の側から見ての所論であつて、教師の側よりすれば、一概にさう論じ去る可きものでない。從來も屢々言はれたる如く、教科書の活用と言ふことは、教師の手腕にある事だから、その考へが大切な事であらう。

然し乍らそれにしても、現行の我國教科書は矢張り、兒童の自己研究のためには無價値たるを免れぬ。少くとも兒童が學習の具とすることは出來ない。教師に依りて教へられて、初めて活用を見る樣なものは、ダルトン・プランでは使用するの價値がない。

唯、教師が豫定案を作る時に多少の參考とはなるのである。

右論じたるが如くにて、教科書の問題は、當然、參考書の問題に歸着しなければならぬものである。

四、參考書の價値

ダルトン・プランでは、兒童は豫定案を中心として、自己創造の學習に進んで行く。實驗室内のすべての設備は、豫定案を對象として準備されたものと言つても良い。豫定案の學習を完成せんがための資料として、參考書、繪畫、表圖、實物等が備へられる。その中にても參考書は最も多く使用せられ、問題解決の資に供せらるゝことが多いものだ。

今更ら參考書の價値を論ずるまでもあるまい。ダルトン・プランに於ては、教師よりも參考書の方が大切である。參考書は兒童の相談相手であり、顧問であり、助力者であり、指導者である。兒童は學校の實驗室にありて、かくの如き組織のもとに學習を進めつゝある中に、生涯の生活に重要なる性格を形成する事が出來るのである。但、學校時代は、年少にして時には不適當なる事をする憂もあるので、教師が始終附き添ふて居て、導く樣にする。けれ共、兒童は飽くまで自己の能力に賴りて參考書を相手に研究することを要求せられる。

右述べたる所にても明らかなるが如くに、參考書は教師よりも重要なる位置に居るものである。これに依りても、ダルトン・プランが參考書の價値を如何に重大視して居るかゞ伺はれる。從つて實驗室内に備付くべき參考書の撰擇には、頗る意を用ひて、少しも生徒に不利益を蒙らしめぬ樣にして居る。全く、參考書の適否は、兒童の學習能率の上に甚大なる影響を與ふるものである。

蓋し、何人も經驗あるが如くに、或る問題に考へ惱みたる時、善良なる參考書を見て、その解決が與られたる事程愉快を感ずるものはあるまい。その問題が困難なりし丈けそれに伴ふ愉快もまた大きい。思はず案を叩いて萬歳を叫ぶことすらあるのである。

かゝる事は、次の學習に對する元氣を鼓舞し、研究心を奮起せしむるの原動力となるものである。

これに反して、若しも適當なる解決が與へられざりしとせよ。決して愉快なる氣持

はしない。勿論、一の參考書より他の參考書へと解決の資料を發見するための、空しき努力は、時に依りては致し方もない。參考書の價値標準を、解決の資料の有無のみに置くことは出來ないが、勿論、その豐富なものに價値のあるのは言ふまでもない。

不適當なる參考書は兒童に對して不斷に不利益を與へて居る。之れに反して、善良なる參考書は不斷に利益を與へる。その結果に於て非常なる差異を來すのは明白である。

ダルトン・プランの實施に就きては、教師は先づこの參考書の問題に頭を惱まさなければならない。

五、兒童用參考書たるの要件

價値ある參考書とは抑も如何なる要件を備ふべきものであるか。

一、記述が平易でなければならない。兒童が一讀して直ちに理解し得るものたるこ

とを要する。

二、理解し易からしむるためには、出來得るだけ多くの繪畫、圖表等を添付しなければならない。記事と相互對照して、兒童は眞に理解を得ることが出來るのである。

三、體裁優美にして、兒童に好愛の念を起さしむるが如きもの。

四、價格のあまり高からざるものなること。但し、學校備付用としては少々高きものありてもよし。

五、あまりに專門的に流れず、一般的に成る可く多方面の資料を蒐めたるもの。

六、必要なる研究資料をさがし得る便宜のため、索引を附すること。

その他擧げ來れば尙種々とあるであらう。けれども要するに平易にして理解し易からんことを主眼とする。また一般の書籍にも讀み慣れしむる必要がある。

尙、參考書として辭書を擧げなければならぬ。實に辭書は參考書としては最高の價値を有するものである。自己教育への道へ導き入れるの第一歩は辭書の使用法を知得

せしむるにある。辭書の使用法さへ十分に解れば、その兒童は最早や自からの學習の道を進んで行くことの能力を得たものと言ふことが出來る。

七、參考書の缺乏

翻つて我國の現狀を顧るに、上述の如き參考書が果たして供給されて居るのだらうか。私はそれを思ふては深き失望を感ぜずには居られない。私の知れる限りに於ては、參考書と言ふ參考書は唯の一冊も見付からない。

兒童用の讀物としては童話や理科談やその他種々のものが、恰も雨後の筍の如くに出て居て、殆んど應接に遑がない程である。それにも拘はらず、ダルトン・プランを實施して、兒童の研究資料にしやうとする樣な參考書は一冊も無いと言つて良い。適當なものも不適當なものも一冊も無いからどうすることも出來ない。

斯くの如く、我國に於て兒童用の好參考書に缺乏せるは果して如何なる事由に基く

ものであるか。私は大體二つの原因があるものと考へる。

一、我國字問題に因せること。

二、教師の不熱心なること。

七、我國字問題と參考書

英國の如くその國字が割合にやさしくして、大人の讀む書物と、兒童の讀むものとが、大して差異のない樣な國にあつても、教科書や參考書の問題には相當の困難を覺えて居る。然るに、我國の如き難解なる國字を有して居る國の兒童が、自由に讀破し得る如き書物を欲しても能はないのは、或は當然のことかもわからぬ。

國字改良論の唱へらるゝことも、隨分久しきものである。けれ共恐らくはその解決の時期は容易に來ないことであらう。國字の改革と言ふ事は、論ずべくして容易に實行の出來るものでない。然らば、かゝる事情のもとに、我國の兒童は永久に不利益な

る狀態に居なければならないものか。

ダルトン・プランの實施には、どうしても適當なる參考書を得なければならない。兒童に參考書を與へずして、獨學自習を命ずるのは、絶對に不可能なることを命ずるものだ。單にダルトン・プラン實施と言ふ點からのみでなく、一般に教育的の見地よりして、兒童に適當なる參考書を與へることは、我國教育界に於ける急務中の急務と言はなければならない。今日までに既に多くの、自學自修主義教育が唱へられ、又實行せられた。然るに兒童用參考書の問題が、斯くの如く閑却せられて居たのは如何なる理由に基くものであらうか。

由來、我國の學者は、書物を書くに、難解の語を使用する癖があると言ふ。これは必ずしも國字問題から來たものではないかもわからないが、私の見る所では矢張り國字が餘程祟りをなして居るものと思ふ。この弊が、惹いては兒童用參考書に累をなして居るのではなからうか。

私は、教育關係者諸氏の熱心なる努力に依れば、兒童用の適當なる參考書も案外容易に出來得るものと確信する。

八、教育實際家に望む

中學校の上級にもなれば、最う普通の參考書を十分に讀むことが出來る。私がこゝに言ふ兒童とは、中學校下級及小學校の兒童を指したことではあるが、中學校の方はそれでも、いくらか參考書も出來て居ると思ふ。けれ共、小學兒童用の參考書と言へば、實に貧弱極まるものである。たま〳〵手に入れたるものを見るに、低級杜撰にして、到底參考書たるの價値を有して居らない。

私は特に初等教育に從事せらるゝの實際家に望んで置きたい。自ら進んで諸種の參考書を述作し、以つて兒童の自學の資に供せられんことを、それを熱望するのである。こんな事は所謂大家とか學者とかに任せて置くべきことではなく、諸氏の手自らにて

作るべきものだ。私は、現今兒童用參考書の乏しき事を、敢て教育實際家の不熱心のいたすところとする。

兒童の讀物に關する調査研究は、我國に於ても最近非常なる進歩を來した。政府に於ても、民間に於ても、その他各種の教育團體の手に依りても、この方面の事には非常に力を盡くされつゝある。けれ共、今日までに現はれて居る多くのものは、所謂單に、讀物と稱すべきものであつて、兒童が各學科に就き、學習研究をするための參考資料たり得る價値のあるものは殆んど認めることが出來ない。歐米諸國に於けるが如く、大人の書物にても兒童が讀むに大して困難を覺えない樣なものであるならば、この問題も自ら別途の解決方法を見出すわけであるが、我國の現在に於ては、それは絶對に不可能のことに屬する。

現在の教育界に於ける緊急問題は何と言つても兒童用參考書を供給することにある。それは、ダルトン・プランを實施すると否とに拘はらず、教育實際家の考慮を拂

はなければならぬ重要問題である。而してこの問題は、他人の手に任かせて置くべきものではなくて、教育實際家自からの手に依りて解決さるべきものだ。

參考書の一として、兒童用辭書の作製も、必ず教員諸氏の力に依りてなされなければならない。現今では、兒童用として、國語の辭書は既に數種のものが坊間に現はれて居るのを見るのであるが、それ等には未だ〳〵改良の餘地があるのは言ふまでもなく、單に國語の辭書のみに限らず、各學科に渉つて簡便なる辭書の現はれんことを切望する次第である。兒童用の地理辭典、歷史辭典と言ふが如きものは、兒童の學習上に、如何に便益を與へるものなるかは今更ら喋々するまでもない。その他兒童用の百科辭典の如きものも、近き將來には必ず現はれなければならぬ性質のものである。

歐米諸國に於ては、この種の兒童用辭書も頗る豐富なるを見ては、誠に羨望に堪えない。如何に國字問題の難關があるとは言へ、教育關係者諸氏の熱心と誠意とさへあらば、この事業の如きは眞に一擧手一投足の勞をも要せずに出來るであらうと思ふ。

自學主義の教育にありては辭書は最も有力なる武器たるは言ふまでもない。

私が前に、參考書たるの要件中に擧げたる一項、卽ち參考書には必ず適當なる索引を附して、研究資料をさぐるに便せしむべしと言つたのは、參考書と辭書とを同時に兼ねしめやうとしたのに他ならぬ。

私の考へる所に依れば、ダルトン・プランをその儘模倣して實施すると否とに拘はらず、將來の教育は必ずこの種のものでなければならぬと思ふ。卽ち兒童自らをして參考書を力に學習せしむる方案は、將來の如何なる教育方案にも採用しなければならぬものである。

自學主義教育の唱へられる割りには、その根本問題の解決されて居らぬのが、我國現今の教育狀態である。偶々ダルトン・プランの如き教育方案の唱へられるのを見て、私は益々その感を深くせざるを得ない。

適良の參考書なきことが我國に於てダルトン・プランの實施を困難ならしむる理由

の一であることは誰れしも認めて居る所である。然らば吾國は、それの現はれるまで待つて居なければならないものであらうか。

この問題は所詮は、教師その人の手腕如何に歸する。參考書以外に、我國に於ては尙未だ、ダルトン・プランの實施を困難ならしむる事由は多い。それは次章に於て論述する考へであるが、たとへ理想的に案を實行することが出來ないでも、この案の主張する所の精神を體得し、その利益を收めやうとすることは、教師の手腕一つにてどうにでもなる。

本章を終るに當つて、私は教育關係者諸氏が、擧つて適良の參考書を供給せられんことに努力を惜まざることを熱望し、他人のなす所を待つ事なく、自ら進んで事に當られ、兒童自らの成長發展のために盡くされんことを祈る次第である。

第十一章　我國教育界の實狀とダルトン・プラン

一、我國の教育方針とダルトン・プラン

各國には、その國家的見地より決定せられたる、確固たる教育方針がある。故に、國情を異にせる他國にて唱導されたる教育學說も、直ちにそれを採り、以つて實行することは出來ない。この意味に於て、ダルトン・プランが我國の教育に用ひらるべきものであるか否かを、こゝに少しく研究して置くべき必要がある。

ダルトン・プランは目下の所未だ一の學說としては十分であるとは言はれない。それ等は今後に於て、尙多く補はれる所があるであらうが、然し乍らその主張する所は

既に明白である。本書の初めに於て論じた通りであるが、尙足らざるを補ふて、玆に繰返し一言するの必要を感ずる。

既に論じたるが如くに、バークハースト女史の强く主張する所は、社會生活と學校生活との合同一致と言ふことである。これを別言すれば、卽ちダルトン・プランの根本精神は、デモクラシーの思想を學校に取り入れると言ふことになる、何となれば、現代の社會生活の基調は、言ふまでもなくデモクラシーであり、從つて學校生活をして社會生活の模範的實習場たらしめやうとするのは、卽ちデモクラシーを學校生活の基調とせんとするものに他ならないからである。

この基調に立つて、ダルトン・プランは如何なる敎育理想を實現せんとするのであるか。

思ふに、デモクラシーには二種の主調がある樣である。卽ち、一は道德的主調で、他は心理的主調である。

道德的主調とは、社會生活を營む個人間に於ては、相互にその人格權利を尊重し、相侵さないと言ふことである。自己の主張すべきことは飽くまでも主張すると共に、他の者の主張は容れなければならない。自己の權利と共に、他の權利も認めなければならぬ。この思想に眞に徹底したものは、自己に對しては自立の人となり、他人に對しては協同の人となり、長上に對しては從順の人となる。この自立、協同、從順の三つは、デモクラシーの道德的主調の根本である。

心理的主調と言ふのは、所謂獨立獨行の精神である。自己の本務を遂行するに當つて、毫も他人の指揮命令を待たず、自ら進んでこれをなし、實行に當りては、自らその方式を考へ、時處位を工夫し、徒らに他に模倣することをしない。かくして、發動、創造、努力等の、心理的主調となるのである。

ダルトン・プランは右のデモクラシーの精神を、學校生活に取り入れ、以つて社會生活の環境に順應し得るの人を作らんことを理想とする。

我國の教育方針がこのダルトン・プランの教育理想と相脊馳して居るのであらうか。勿論こゝに言ふ教育方針とは、教育理想を國家的見地より眺めたるものである。

我國家の教育理想は、教育關係の各種法規の中に見る事が出來るのであらう。小學校令、中學校令、高等女學校令、師範學校規定、その他各種の學校より大學に至るまで、その第一條には、明らかに教育方針が示されてある。試みに小學校令第一條を擧げて見んか。

小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ、道德教育及國民教育ノ基礎幷其ノ生活ニ必須ナル智識技能ヲ授クルヲ以テ要旨トス

條文簡にして、これのみでは、ダルトン・プランの如き具案的教育方針と比較論評することは不可能であるとも思ふが毫もダルトン・プランの思想に脊馳せざることは、首肯することが出來やう。

由來、條文法規は一の死物である。一國の教育方針はそれを基礎とすべきは言ふまでもなきことではあるが、社會狀態の變化に伴ふて多少變動することは免れない。現今の如く、デモクラシーの思想が旺盛なる時、獨り學校のみがその範圍外に特立して居ると言ふ理由はない。如上の見地よりしても、ダルトン・プランの決して我が國家教育理想に脊馳せざると共に、眞に社會的要求に合致した教育方案たる事は明らかであらう。

最近、文部省督學官山內雄太郎氏は左の如き意見を發表した。文部省にある氏としての言とすれば、それを聞く私には特別の意義ある言葉とも思はれる。

教育は自然人として完全なる發展を期すると同時に社會人としての發達を期せなければならぬ。我々は社會生活を營むには、協同生活の何たるかを理解し、協同精神を養ひ、職業に必要なる知識を修得し、社會共存に必要なる德教を體得して行かなければならぬ。此を全くする社會人を養成するのが、教育の社會的意義でなくてはならぬ……。

ダルトン・プランの目指す所も全くこれと同一の目標ではなからうか。

二、我が教育制度とダルトン・プラン

この問題は、ダルトン・プランを實施せんとするものゝ、何人の心にも浮かぶことである。ダルトン・プランの利益あることはわかつた。然るに現行制度のもとに於て果たしてそれが實行され得るであらうかどうか、と言ふことである。

勿論、或程度までは、制度の束縛も受けなければならぬ。けれ共、これは左程に悲觀すべき問題ではないと思ふ。私はこゝに、その二三の事實に就きて論述を試みたいと思ふ。或人は、現行制度を改正せざれば、ダルトン・プランは實行が出來ないとも言つたが、私はさうは考へて居らない。

先づ第一に學級編制をかくの如くに變更し、時間割を廢止することが許されるのであるかどうかと言ふ問題である。けれ共、これは決して心配する程のことではない。

前にも一言せるが如く、ダルトン・プランは決して、學科課程の變更や、學級全廢を要求するのではない。成程、文部省より發せられたる法令には、一週間の教授時數と言ふものがちやんと決定されてある。小學校教科で言へば、修身、歴史、地理、理科各二時間、算術四時間、國語十時間と言ふ樣になつて居る。これで見ると、ダルトン・プランの如く、兒童が自由の時間に、勝手な學科目を學習すると言ふことは、迚も行ふことは出來ない樣にも思はれる。けれ共、ダルトン・プランとても、全然時間割を無視すると言ふわけではない。一週間の中に、自由時間が何時間、學級教授の時間が何時間と言ふことは定められて居る。故に、自由時間に配當したる時間總數と、自由學習をなす學科目に配當したる、文部省令の時間總數とが變じなければ毫も差支ないわけである。例へば、某校六學年に於て自由學習の學科目を地理、歴史、算術の三科目としたとする。省令に依れば、この時間總數は一週八時間である。(地歴各二時間、算術四時間)故に、その際は、時間割の上に於て、自由學習の時間を八時間にす

れば良いわけだ。他の科目も、自由學習とすれば、それに從つてその時間も增加するわけではあるが、かくなると、省令にて要求する通りの學習が兒童には出來ずに、例へば歷史を一週一時間しか學習しなかつたり、或は全然やらなかつたりしないかと言ふ疑問が起る。而して、それは法規に違反することではないかと問ふものがある。けれ共これも敢て差支へることではなからう。豫定案はすべて省令の要求する所に基きて作製されるべきものであるから、たとへ一週二時間の所を一時間、半時間やつても、實質は二時間をやつたと同一である。豫定案を完成しなければ、學習は決して進めないのであるから、兒童は學習を完成せずして進むことはない。而して二時間の所を一時間にて濟ました兒童には、その餘裕の時間を他に振り向けしむる。他には二時間の所へ、三時間を要するものもあらう。この兒童の自由にまで干涉する法規はあるべき筈はない。

ダルトン・プランは、學科課程にまで變更を加へなければ實施が出來ない樣に思つて居る者のあるのは、誠に謬つた考であると言はなければならぬ。

次に、教室を實驗室に改造することである。これも、前言の通り、學級と言ふものを全然廢止すると言ふのではないから、一寸も問題にはならぬ。現今の學級へ、參考書、實物標本、表圖等の設備をすれば、それで直ちに實驗室となる。自由學習の時間には、某科目の實驗室となり、その他の時間は從前通りの學級である。之れは教室を最も教育的に利用したもので、今直ちに之れを實驗室にすることが、毫も法規に觸れるとは思はない。

次には教科書使用問題である。然し之れは、私の考へに依れば毫も問題となるべき性質のものではない。教科書を活用するの餘地はいくらでも與へられて居る。教科書に拘泥する必要は少しもないのだ。ダルトン・プランの要求するが如き國定教科書の出現を望むのは少しく無理ではあるが、實際教育家は、そんな問題に拘はるよりも、適良なる參考書を供給せんことに苦心しなければならぬと思ふ。而して私の見解に依れ

ば、如何にダルトン・プランを採用したとて、教科書は教科書として矢張り使用せしむるが良いと思ふのである。全然廢止することには容易に賛成し兼ねる點がある。

右述べたるが如く、現行制度のもとに於て、ダルトン・プランを實施することは決して差支へないことである。勿論、全然ダルトン・プランの教育理想よりして、その案を實行せんとすれば、ある點に於ては制度に背馳することもあらうが、私はむしろ制度の上よりも實際の方に、ダルトン・プラン實施上の難點が多く横はつて居るのでなからうかと思ふ。

三、我國の教育的施設とダルトン・プラン

誰れかゞダルトン・プランを評して、金のかゝる教育方案だと言つた。勿論、ダルトン・プランを實施せんには相當の設備をしなければならない。我國の現狀として、その設備が果して出來得るか否かと言ふことが、私達の問題となつて來る。

先づ實驗室に備へ付くべき各種の參考書類の設備費である。然し之れは小學校に於ては、前にも言ひたるが如く、その先決問題たる、良參考書の供給が十分でないから、設備費よりもその方の問題に惱まなければならない。

中等學校に於ては、どうしても經費に困ると言ふならば、各生徒の教科書代を參考書に振替へても良いと思ふ。ダルトン・プランは、生徒自らが一種の教科書を作ることを理想として居るのであるから、生徒各自が、一人一人に同一の教科書を持つて居なければならぬ必要は少しもない。故に教科書代のいくらかを學校に納めさせて、參考書を見せる樣にすれば可なりの設備も出來るであらうと思ふ。

參考書以外の、諸種の研究資料である。之れは勿論今まで學校にあるものはすべて、各學校實驗室へ分配し、尙漸を追ふてその完備を期すべきものである。從來、學校の設備品は兒童の手を觸れしめざりも惡弊があつた。その破損せんことを慮つての事には違ひないが、かゝる弊風より脫して今後は大いに兒童の研究資料に利用せしむべき

である。但、それがためには、兒童をして如何なる目的のもとになすかを、十分に自覺せしめ、所謂、理解せる作業に導かなければならぬ。

學級問題も、施設問題として考へる必要がある。然しこれは曾つて論じたるが如くに、一學級、即ち一實驗室にて全科目の實驗室たるの役目をも出來ないことはないから、敢て重要困難なる問題と言ふのではない。

その他ダルトン・プランと施設問題を論ずれば隨分多くの問題が提起される。然し要するに之れは漸を追ふてなすべきものであつて、初めからその理想的完備を望むべきではない。現在の狀況のもとにありて、如何にして最大の効果を擧げ得るかを考へるのが、經驗あり、手腕ある教員の苦心する所である。然る上に於て徐ろに理想實現に向つて進むことが、最も策の得たるものであらう。

ダルトン・プランを實施したいが、經濟的事情は之を許さぬと言ふ事由によりて、採用するを躊躇することは全く無用の事である。

四、教員に關する問題とダルトン・プラン

ダルトン・プランはその原則として、各學科に對する專門の教師を要求して居る。各學科實驗室には、それ〴〵專門の教師が附添ふて居て、絶えず兒童に對して指導助力に努めて居る。

我國にては、中等學校以上は專科擔任になつて居るけれども、小學校ではさうでない。ダルトン・プランを實施することゝなれば、教員養成の方法からして改革しなければならぬではないかと言ふ者がある。然し之れも決して大して困難なる問題ではない。日本の現在の小學校教員にして、唯それを實行するだけの確信と決心とさへあれば、苦もなく解決され得ることである。このことに就きては既に第七章第二項に於て述べたのであるから、こゝには繰返して言はない。法規上に於ける學級編制と、教員配置の方針とは決して矛盾することなしに、現在の儘で實施することが出來る事であ

る。勿論、これもダルトン・プランの理想より論ずれば、教員養成の方法その他のことに改革を加ふることの必要あるは言ふまでもない。既に現在我國に於て、師範教育改革を論ずるもの〻多いことも考へられる事がらである。それらの論者の一致した意見は、師範學校の上級では少くとも文科、理科位の分科として、それ〴〵の生徒を收容すべしと言ふのである。私も近き將來に於ては、必ずそれが實現され得ることを信じて居るものである。勿論、それが必ずしもダルトン・プランの理想に合致したる改革であるとは言ふことが出來ないけれ共、一般教育界の趨勢が、ダルトン・プランの主張する如きものとなりつ〻あるの事實は、十分に認めることが出來る。

そこで、私の私見を述べて見れば、ダルトン・プランの實施と現在の教員との問題は、むしろその教員の實質如何と言ふことになる。即ち、教員各自が、ダルトン・プランを實施するだけの十分なる確信と決心と能力がありや否やと言ふことである。

我教育界の弊の最も著しきことは、何か新らしき教育說や、主義主張が現はれると

それに對して十分の研究も批判も試みずして、無條件に採用せんとすることにあつた。その結果は、教育上の利益を收めることが出來る所ではなく、却て生徒を毒することに終つて居る。ダルトン・プランの主張が高調せらるゝに伴ふて、矢張り斯くの如き弊が現はれはしないかと言ふことを私は憂ふる。

生徒の自由を尊重することの强きもの程、教師の學識手腕を要求する事が多く、若し方法を誤れば、その害の及ぶ所も、實に取り返しのつかぬ程大きなものである。自由教育と言ふことが大いに高調された時、それがために毒せられた教師と生徒とのあつたことを私は知つて居る。教師の毒せられた事は問題外とするも、生徒が蒙つた不利益に至つては、看過すべからざる罪惡である。

ダルトン・プランは今までの主張よりも、尙多くの自由を兒童に認めんとするものだ。これを實施せんとするものは、餘程の確信と手腕とを要する。而してこれに對する周密なる實際的研究と、周到なる準備を以つてし、その運用を誤まらざらんことが

大切である。

五、兒童に關する問題とダルトン・プラン

ダルトン・プランの實施に關して、次に考慮を要すべきは、我國の兒童が、一般にダルトン・プランの實施に適するかどうかと言ふことである。その性質や、氣風に、は數千年來の歴史に根ざした、根抵の固いものがある。故に、英米の兒童に好適した る方案を、直ちに採つて以つて我に適用することは輕擧たるを免れない。

然しこれは餘程重大な、根本的問題である丈けに、比較研究を要することも多く、私はこゝで輕々にその是非を斷定することは出來ない。けれ共、デモクラシーの社會生活に適應する市民を作らんとするダルトン・プランの主張が妥當なるは、既に述べたる所に依りて明白である。若しそれに反する氣質が、我國の兒童に持たれて居るとしたならば、それは漸次に矯正されなければならぬものだと確信する。

斯樣なることよりも、もつと現前の事實として私が心配することは、從來の學級教授、先生に教へらるゝことに慣れたる兒童が、直ちにダルトン・プランの如き方案を實施されたならば、餘程面喰つて茫然自失することはないかと言ふことである。

急激な變化は良くない。英米に於ける實施の經驗に依るも、その初めの中には、或兒童はたしかに面喰つたものであると言ふ。慣れない中は、何となく落ち付きがない樣であるから、生徒のみならず教師までもが、從來の方法が良くはないかと言ふことを思ふ。學習の進度もどうも思はしくないといふことになる。けれ共、それ等の事は間もなく消失して、教師も生徒も共に、愉快に學習が出來る樣になると言つて居る。

一般に受動的學習に慣れたる我國の兒童には、決して急激にダルトン化すると言ふことは不可ないと考へる。教師も無論初めての試みであるから、あまりに急激なる改革は、必ずや失敗の因となる。故に、すべての事を一時に始めることはせずに、漸進的態度をとることが、得策であると信ずる。さうして經驗を重ぬる中に、次第に擴張